
真・恋姫無双～陷陣営転生伝

南斗星

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真・恋姫無双〜陥陣営転生伝

【Nコード】

N2735U

【作者名】

南斗星

【あらすじ】

陥陣営といわれた武将「高順」

彼が正史で死を迎えた後目覚めた世界とは、「恋姫」の世界だった。主役の高順と彼の仲間が織り成す新たな外史が今幕を開ける。

あれ？ヒロインって恋じゃなかったっけ、出番がないぞ！？

序章 陥陣営といわれし漢（前書き）

序章は正史の世界から始ります。拙い物語ですが、よろしければお付き合いです。

序章 陷陣営といわれし漢

「高順將軍！下？城が落ち、呂將軍が捕らわれたようです。」

下？城から出撃し曹軍の手勢を押し返した俺のもとに伝令が駆けつけてきた。

「なんだと！殿ともあるうお方が、そう安々と捕らえられたと言うのか！？」

下？城が水攻めにあい部下たちの士気も衰えていたとはいえ、この短時間にあの「天下の飛將軍」とうたわれた殿が捕らえられ、下？が落ちたとは信じられなかった。

「それが・・・お味方の候成、宋憲、魏統將軍が裏切り殿を捕らえ曹操に降伏したらしいと！」

っ・・・そうか・・・俺の諫言にも耳を貸さなくなっていたが、もう忠臣達も殿を見限っていたか。

それにしても情けない・・・たとえどんなことがあるうとも、最後まで信じた主人に仕えるのが武人というものだろうに・・・。

俺はふう〜と深い溜息を一つ吐き出し、じつと虚空を見つめ一瞬目を瞑った・・・。

（殿、すみません。俺は最後まで役立たずだ・・・。どんなことがあろうとも最後まで殿をお守りすると誓ったのに・・・。）

（守るところか殿にいただいた恩を何一つ返せなかった・・・）

胸の内に、殿と出会ってからの様々な想いが駆け巡る。

もはやこの世になんの未練もないと感じた・・・。

（殿、殿が冥途に逝くというなら、せめてそのお供くらいさせて下さい。殿ほどの英雄のお供が陳宮だけじゃ淋しいでしょう・・・。）

俺はこちらへと向かってくる曹軍の大軍へと馬を向ける。

「高將軍、我らはどういたせば？」

と聞いてくる部下に背を向けたまま

「俺は殿の死出のお供を仕る・・・。お前達は早く逃げな」と告げる、

すると、
「將軍、我らもお供させてください！」と残った部下全員が言った・・・。

一瞬だけ振り返り部下たちを見ると、全員が覚悟を決めた顔をしていた・・・。

「勝手にしな・・・。戦は終わった、死ぬも生きるも後はお前たちの自由さ」

馬鹿どもめ・・・。と苦笑しながらつぶやくと全員が苦笑いを浮かべた・・・。

「さて、殿を待たせるわけにはいかねえ、逝くとするか！」と声をかけると

「おう！！」と勢いよい答えが返ってきた。

そしてドツと、曹軍へと全員が駆け出した。

「向かってくるやつは全員叩き斬る、命のいらねえやつだけかかってきな！！」

こちらへと気が付き向かってくる敵兵を切り伏せながら、曹軍本陣へと突き進む。

そして曹操に向かい、高らかに名乗りをあげた。

「我が名は高順、天下の飛將軍呂奉先の一の部下なり！！」

・・・

。。。

序章 陥陣営といわれし漢（後書き）

次回からは、「恋姫」の世界へ

第一話 恋姫の世界へ

「・・・。」

誰かの声が聞こえた気がした・・・懐かしい声が・・・

「・・・。」

誰の声だったろう？

「・・・順・・・。」

ああ、わかっているよ・・・約束だ・・・

「・・・高・・・順・・・。」

だから、そんな悲しい顔しないで、

今度こそ守って見せる・・・約束・・・

・・・

・・・

バキッ

「起きるのです、そんなところで寝こけてたら邪魔なのです!!」

頭を蹴られたような衝撃が襲うとともに、そんな怒鳴り声が耳元でした。

「いつ痛つてーっ何するんだー!!」

と、俺は飛び起き衝撃を与えてくれたであろう人物に掴み掛かった。

「なにするんだーではないですぞ!そんなところで眠っていられたら邪魔なのですぞー!!」

と、俺の手を跳ね除けようとした相手を良く見ると、まだ小さな女の子だった。

「なんだガキか」

「ねねはガキではないですぞー!」

と俺の一言に反発して叫んでくる。どうでもいいがやかましい子供だ。

「そんなことはどうでもいい、貴様なぜ俺の頭に蹴りをくれやがったんだ?事と次第によっちゃあ、温厚な俺でも怒るぞ!」

「そんな所で寝てられちゃ迷惑なのですぞ!」

「ああん?どこで寝ようが俺の勝手・・・てっ?」

ふと周りを見渡せば、さっきまでとまったく違う光景が広がってい

た。

「なあ、ガキ？」

「ガキではないと言ってますに！」

「ここどこだ？」

俺の問いに、目の前の子供は呆気にとられた表情で

「何いつてるんですか？ここは洛陽の南方にある南陽って街の近くですぞ？」

南陽だと？俺は確か下？城で曹操と戦っていたはず・・・。

そして、殿が捕まったと聞き、曹軍に突っ込み・・・そして・・・？。

それじゃあ、ここは・・・俺は・・・？

「大丈夫ですか？」

と、子供が覗き込んできた。

「あっああ、大丈夫だ・・・。」

と、なんとか答える。

「そ、それよりお前はここで何をしてるんだ？」

と、話を逸らして聞くと

「ねね達は仕事のため、ここにきてるのですぞ」

「仕事？」

「はいですぞ。ここを黄巾賊3万が襲うとの知らせにより我らが主から討伐の命が下ったのですぞ」

「こ、黄巾賊だと？」

子供の一言に愕然となる・・・。

「馬鹿な黄巾賊が今更なんで・・・。」

俺の漏らした一言に子供が首をひねる

「今更とはどういう意味ですか？黄巾賊は全国を荒らしまわってる今もつとも大きな勢力の賊徒なのですぞ？」

「・・・はっ？」

馬鹿な・・・黄巾賊などすでに滅びて・・・いや、それ以前に俺は・・・？

と考え込む俺を無視して、子供が

「とにかくこんなとこにいと迷惑だし、あぶないですぞ！さっさと逃げるのです。」

と喚くが、

そんな言葉も耳に入らず、呆然としてると1人の女性らしき人影がこちらに歩いてきた。

「ねね、お腹すいた……。ご飯」

これから戦場になるという場所に似つかわしくない声に目を向けてみると

燃えるような赤い髪と瞳をした少女がそこに佇んでいた……。

高順について（前書き）

ここで高順についての簡単な説明

高順について

高順とは？

中国の後漢時代に呂布に仕えた武将。人となりは清廉潔白な人だったらしい。

一切酒を飲まず、賄賂も受け取らなかったらしい。真面目すぎて上司に嫌われるタイプ？

実際、呂布も高順の武勇や忠誠心は認めてたけど、疎んじて高順が育てた部下を自分の親戚の魏続に指揮させたりしたらしい。あと陳宮とも仲が悪かった。

呂布にどんな仕打ちを受けても終生恨まず、忠義を尽くした。

攻撃した敵の陣を必ず落とすことから「陷陣營」とよばれたらしい。作中の最後とは違って呂布や陳宮とともに捕らわれた後、命乞いを一切せず呂布とともに処刑された。

第二話 方天画戟

Side：高順

「ねね、お腹すいた・・・ご飯」

と赤毛の少女がつぶやいた。

戦場に似つかわしくない、およそ武人とはかけ離れた可憐な少女がそこにいた。

初めて会ったはずなのに、なぜか懐かしい匂いのする少女。

なぜだろう？とぼんやり考え込んでいたが、その手に持つ武器を見た瞬間愕然と呟いてた・・・。

「馬鹿な・・・あれは、方天画戟・・・。」と、

方天画戟とは我が主「呂布奉先」が使用した武器で、あれを扱えるのは大陸広しといえど我が主だけのはず。

しかしその武器はまるで少女のためにあつらえたかのように、手に馴染んでいた・・・。

「おお恋殿！ご飯は黄巾賊を掃討したら、月が振舞って下されます

ぞ。それまでこちらのお饅頭で我慢してくだされ。」

と、先ほどの子供が饅頭の入ったらしい袋を取り出した。

はむはむっ「お饅頭、おいしい・・・。」

「って早っ」

恋と呼ばれた少女は、袋を受け取った瞬間、もう饅頭を食べていた・。

いつ取り出したのか、見えなかったぞ・・・。

って、それより彼女に聞きたいことがあった俺は、そっと声をかけた。

「なあ、君その方天画戟・・・いや武器どこで手に入れたの？」

すると赤毛の子は、饅頭をほっばりながら、

「・・・？誰？」っと可愛く小首を傾けた。

「ああ恋殿、その輩はそこで寝てた変なやつですぞ」

「誰が変人じゃい！？」と子供の答えに突っ込みを入れる。

「・・・変なやつ？」

と赤毛の子が、変な生き物を見るような目を向けてきた。失敬な

「いや違うんだ。気が付いたらここにいただけで、こんな所で寝る

ような変人じゃないぞ、俺は」

なんか、この赤毛の子の純粋なまなざしに耐え切れなくなった俺は
必死に言い訳をする。

「恋殿はこれから大切な使命があるので、お前のような変人に
かまってる暇はないのです！」

「変人ではないと言ってるだろ！」

「いいから早くどこかへ行くのです。恋殿の邪魔をしたらゆるさな
いのですぞ！」

と、不毛な口喧嘩が始りそうになったとき、3人の人影が近いてき
た。

第二話 方天画戟（後書き）

次回タイトルだけは決まっている
「深紅の呂旗」

第三話 深紅の呂旗（前書き）

この話の修正に2時間くらいかかってしまった・・・。

第三話 深紅の呂旗

S i d e : ? ? ? ?

官軍が大陸各地の黄巾に気を取られてる隙に、私達はこっそり荊州南方から洛陽に進入しようとしていた。

「ふふーん、官軍もまさか私達が本拠地から荊州に移動してるとは気づかないでしょうね」

「本拠地には影武者も用意したし情報操作も完璧」

「お姉ちゃん、都で歌うの夢だったんだ」

「わたしも」

「姉さん達、まだ成功したわけじゃないんだから、あんまり浮かないで」

「だいじょぶだよ、我が軍最強の軍師様が立てた作戦なんだから」

「そうそう」

「はあ、二人ともお気楽なんだから・・・」

そんなことをワイワイと話してたら、伝令の人が走ってきた。

なんでも前方に大きな得物を持った女の人と小さな子供、それに武

人らしき男の人の3人が立ち尽くしてるらしい。姉さん達は旅人が何かだろうというけど、私は何か嫌な感じがした。

「一度見に行ってみる。」

私はどうしても気になり姉2人に告げた。1人で行くつもりだったけど、2人ともついてくるという。

「わかったわ、ただし2人とも危なくなったらわたしの言うことを聞くこと。」

「はい♪」「わかったわ」

と軽い返事をする姉達。

はあ。本当に気楽な姉達だ。。

S i d e : 高 順

ねねと呼ばれてる少女と口論してたら、前方から3人の女の子が歩いてきた。

後方からは、軍勢らしき影も見える。

桃色の髪の毛に大きな髪留めをした女の子と、薄い水色の髪を頭の片方に髪留めでまとめた女の子と、薄紫の髪に眼鏡をした女の子の3人組である。3人とも何か派手な衣装に身を包んでいる。

女の子達を観察するような目で見てたらねねが「この助平め」というような目で見てきたが、そ知らぬふりをしといた。

「こんにちは」

と桃色の髪の子が軽い感じで挨拶してきた。

「・・・こんにちは」

と恋と呼ばれた少女が挨拶を返したので

「こ、こんにちは・・・」

と思わず俺も返事を返してしまった。かなり間抜けだ・・・

ちなみにねねはなぜか3人組を睨みつけるようにしていて、一言も話さない。

すると薄い水色の髪で胸も薄い子が話しかけてきた。（なんか睨まれたぞ・・・）

「あのね、ここにいてももしかしたら戦に巻き込まれるかもしれないから、避難してくんないかな？」

「私達の行軍の邪魔にもなりますし、道をあけてほしいんですが」と眼鏡をかけた子が続けて言うてくる。

「え」と、それが・・・

と俺が言いよどんでいると

「・・・（フルフル）」と恋が首を振る。

うむ、可愛い、可愛いがいきなり否定でいいのだろうか？向こうは3万の軍勢とねねは言ってたが、味方の軍隊は辺りに見あたらないんですが？ここら辺は平原が続き、兵を伏せとける場所なんてないし、第一、俺はそんな気配を感じないぞ？

S i d e : ? ? ? ?

何？この子・・・危ないって忠告してあげてるのに、やっぱり頭が少しおかしい子なのかな？

私達はあるがそこで突っ立ってようと、構わないけど後ろの男達がどうするか・・・少し考えればわかるよね？

隣の男もぼーっと見てないで何とか言いなさいよ！

みんな戦闘前で気が立ってるし、最近は黄巾の規模も大きくなりすぎて私達の静止を無視して狼藉を働く連中も増えてきてる。

まあみんな、ちい達の歌が好きで集まってくれてる連中だから、多少のことはしかたないよね？

ちい達には歌で大陸一になるって大きな夢があるんだし、その歌で大陸のみんなを幸せにするんだもん、多少の犠牲はしかたがないっていうか、第一ちゃんと忠告したもんね。

うん、それを聞かないんだからあいつらが悪いんだ、ちい達は悪くない。

ていうか、段々むかつてきた。ちい、早く都に行って歌いたいんだけど。

もういいよ人和そんなやつらどうなるうと、ちい達の知ったことじゃないよ。

そんなことより早く都に行って大きな舞台で歌いたいよ。
みんなきつと、ちい達の歌に夢中になっちゃうよね？
いや〜ん、ちいきつと都でもモテモテになっちゃうな♪

だから早く行こうって言うのに、なんで名前なんて聞くな〜？
どうせ死んじゃうんだし、ほっとけばいいのに・・・。

S i d e : 高 順

眼鏡をかけた子が説得してたが、恋は一向に聞き入れない様子だった。

まあ討伐の任を受けたっていったからな、しかし3人いや俺は元々いない計算なんだから2人か。2人でどうするつもりなんだ？

と考えてたら、眼鏡の子が名前を聞いてきた。

今更名前を聞いてどうするんだ？って思っていたら

「先に聞いたほうが名乗るのが礼儀」って恋が言った。

うん、礼儀正しいね〜。でもそういう問題じゃないよね？

こりゃいざとなったら俺が恋達を逃がすしかないな。

会って間もないけど、縁が出来ちゃったし、恋はいい子みたいだしな。

ねねは・・・。

まあ、ついでつてことで・・・。

「ああそれもそうだね。」と桃色の髪の子が軽い感じで答える。

「私は張角だよ。」「ちよつと！姉さん！」

・・・は？張角？

張角って黄巾の指導者の？

あの「天公將軍」？

「で、こっちの張宝ちゃん、眼鏡の子が張梁ちゃんだよ」よろしくね。」

「地公將軍」張宝と「人公將軍」張梁・・・。

3人ともすでに死んでるはずだし、第一なんで女なんだ？

つと俺が頭を抱えていると

「さあこれでいいでしょ？今度はそっちの番、名前教えなさい」

と自称「張宝」言ってきた。

「その頭抱えてうなつてゐるあんた。名前は？」

と聞かれたので、反射的に

「え、ああ俺は高順・・・」

と答えたら

「こっ・・・じゅん・・・。」

となぜか恋が呟いていた。

「でそっちのお姉さんは？」

と今度は恋を指差し聞いてきた。

「・・・呂」

「呂それだけ？字は？」

「奉先・・・」

呂・・・奉先・・・「呂奉先」・・・だと・・・。

そ、そんな、これはいつたいどういうことなんだ？

何が・・・いつたい・・・起きてると・・・。

俺は混乱し、まともに思考が働かないでいた。

「呂奉先か。ふーん・・・あれ？」

「あれー？呂奉先ってお姉ちゃんどこかで聞いたことが・・・？」

「・・・あ！？呂奉先ってまさか！？」

「・・・董卓軍所属第一師団師団長、呂奉先」

「・・・なっ」

俺はその名を漠然と聞いていた・・・。

「我が使命は北上してくる黄巾党の殲滅・・・。」

「だから・・・張角、張宝、張梁・・・お前達はここで死ね！」

ひいっと三人が息を飲む音が聞こえる。

「ねね・・・。」

「はいですぞ」

「・・・旗を」

「御意っ！！」

と、ねねが旗を掲げる。

その旗を見た瞬間、俺は一瞬目の前が真っ白になった気がした。

「やあ、やあ遠からん者は音にも聞け、近くは寄って目にも見よ！」

「悪鬼は逃げだし鬼神はひれ伏す、董卓軍が一番槍、呂奉先の旗ですぞっ！！」

蒼天に高々とはためくその旗を見て誰かが呟いた

「深紅の・・・呂旗」

第三話 深紅の呂旗（後書き）

1日1話修正するのが精一杯になってきた・・。

第四話 天下無双の槍

戦場に修羅が舞い降りた。

S i d e : 高順

恋が武器を振るうたび、何百何千の人が空を舞う。

黄巾党はもはや反撃どころか逃げることさえ叶わず、ただ地獄をのた打ち回るだけだった。

「すごい・・・。」

恋のあまりの凄まじさに息をすることさえ忘れて、見入ってしまった。

「ふふん、恐れ入ったですか、あれが我が主「天下の飛將軍」こと呂奉先なのですぞ」

とねねが胸を反して自慢げに言う。

恋と呂奉先・・・この2人の関係はどうなのか？張角達も含めてなぜ女性がその名を名乗っているのか？そもそも俺はどうなってしまったのか？これは夢なのか？

疑問は沢山あるけど、ただ一つ言えることは「恋」は「呂奉先」を名乗るのに不足ない、いやそれ以上の実力を秘めていた・・・。

S i d e：天和（張角）

あの女の人が武器を持った腕を振るうたびに、黄巾党の人たちが少なくなっていく。

3万人もいたのに、もう私達の周りの人達しかない・・・。

「何・・・何なのよあの人・・・。」

「化物・・・。」

ちいちゃん達が泣きそうな顔でそう怒鳴っている。

私もすごく怖いけど、あの女の人 of 戦い方を見てたら
（もしかしたらあの人って神様かも・・・。）って一瞬思っちゃった・
。。

29

S i d e：人和（張梁）

まさかたった一人で三万もの兵を蹴散らすなんて・・・。

もう兵は私達の周りに残ったわずかな人達しかいない。

怖い・・・体が恐怖のあまり竦む・・・。

でも逃げなきゃ・・・本当に殺されてしまう。

「姉さん達、走って！」

呆然と立ちすくんでいた姉達の手を引つ張り駆け出す。

残った兵のみんなは私達を逃がそうと、あの怪物に立ち向かってくれた。

「ごめん、ごめんねみんな！」

ちい姉さんがそう叫びながら走る。

私も心の中で謝りながら走り続ける。ごめん、ごめんなさいと・・・。
でも私達はここで死ぬわけには行かない。

三人の夢のため、そして私達を逃がすために犠牲になってくれた人達のためにも！

「ちょっとちょっと待って、お姉ちゃんもう走れないよう。」

と情けない声を出して座り込もうとする天和姉さんを

「だめ、こんな所で立ち止まったら殺されるわ！」

と無理やりに立たせて走らせる。

もう少し、もう少しで国境を越える。そうすればあの人も追ってこないはず。

大丈夫、あとちょっと、きっと逃げ切れる！

そう思ったとき死神の声がした。

「・・・逃がさない」

S i d e : 高 順

三万人いたはずの黄巾党はほぼ壊滅し、残った兵も三人を逃がそうかとするように恋に立ち向かったが、一瞬にして恋に蹴散らされていた。

「・・・。」もはや言葉も無かった・・・。

我が主より強いものなどいるはず無いと思っていたが、恋の実力は明らかにその上をいつていた。

我が主と同じ名を持ち、我が主より遥かに強い女性・・・。

今の状況がどういうことなのか、考えても答えに辿りつけそうも無かった。

「いけないです!」

物思いに耽っていた俺はねねの叫び声ではっと気が付いた。

「どうした?」見た所、恋が危機というわけでもないのに、ねねは血相を変えて恋の元に駆け出した。

「恋殿、それ以上は不味いのです。」

「あ、一人じゃあぶないぞ！」

しかたないので俺はねねの後を追った。

S i d e : 恋

雑魚は片付けた。

あとは三人を殺すだけ・・・。

速度を上げて駆け出し三人の背に迫る。

「逃がさない・・・」

三人を捕まえようとしたときねねの声が聞こえた・・・。

S i d e : 高順

「恋殿、それ以上は駄目ですぞ。」

そう言いねねが恋に駆け寄ろうとした瞬間、殺気を感じた俺はねねを抱きかかえ転がるようにその場を離れる。

「何するですか〜!!」

とねねが言った瞬間、その目の前、さっきまでねねがいた場所に矢が刺さる。

「ちい！」

舌打ちし、逃げる黄巾の生き残りに追いつき、腰の剣を抜き放ち切り捨てる。

「大丈夫か？」

呆然としていたねねに声をかけると、はっと目を覚まし

「あつあのくらいねねなら簡単によけたですけど、余計なお世話なのです。」

そう不貞腐れながら言うねねに、苦笑してたら聞こえないくらいの声で

「でも助かったのですぞ・・・。」と言ってきた。

「ねね・・・だいじょぶ？」

と恋が駆けつけてきた。

「だいじょぶですぞ恋殿、心配をかけましたな」

と笑顔で答えるねねに

「そう・・・。」

と恋も微笑みを返してた。

そして恋は俺に向かつて

「ねね・・・助けてくれてありがと・・・。」

と笑いながら言ってきた。

その笑顔があまりに真っ直ぐで、思わず照れてしまった俺は

「い、いやたいしたことは・・・。」

と、赤くなった顔を隠しながら答えるのが精一杯だった。

「ねね・・・あれ以上追っちゃ駄目って・・・どういうこと？」
と恋がねねに聞いてきた。

確かにもう少しで追いついたと思ったが？

「そうでした！あれ以上行くと袁術の領地に入ってしまうですよ」

ああ、なるほど、

「今袁術と事を構えるのは、月や詠にとってよくないことですぞ」

そうねねに言われた恋は、こくりと頷き武器を下ろした。

「帰ろうねね」

そう言って踵を返そうとする恋に

「あ、あの・・・」

つと俺は思わず声をかけていた。

第四話 天下無双の槍（後書き）

修正しなおしても、たいしたことなかった・・。

誤字脱字などありましたら指摘していただけるとありがたいです。

第五話 旅は道連れ世は情け（前書き）

タイトルも修正しました。

第五話 旅は道連れ世は情け

Side：高順

黄巾党を殲滅した後、洛陽に帰還するという恋達に頼み込んで同行させてもらうことにした。

ねねは渋っていたが、恋に「高順・・・いい人・・・ねねの命の恩人・・・」

と真っ直ぐな瞳で見つめられ、渋々だが同意した。

恋にあの真っ直ぐな瞳で見つめられると、駄目とは言えなくなるよなあ。

そこで改めてお互いの自己紹介をした。

「名は呂 字は奉先 真名は恋・・・よろしく・・・」

ちなみに真名とは心から信頼出来るものにしか預けず、たとえ知っていてもその者の許可無く呼べば殺されても文句が言えない物らしい。

そんな大事なものを会ったばかりの者に、預けてしまってもいいかと聞いたら

「・・・いい・・・高順いい人・・・ねね助けてくれた・・・。」
とぼーっとした表情で言ってきた。

「名は陳宮 字は公台・・・真名は音々音・・・恋殿に免じて「ねね」と呼ばせてやるのです」

と、やや慚然としながらであつたが、ねねも真名を預けてくれた。

それにしても「陳宮」か・・・。

あつちの世界の陳宮とはそりがあわなかつたが・・・。

「俺の名は高順。真名はないから高順と呼んでくれ」

と自己紹介をしたらねねが

「真名がないとは、どういうことですか？」

と聞いてきたのでここまで遭つたことを話すべきか悩んだけど、俺1人で考えたつて答えが出るわけではないと思い、2人に相談してみることにした。(ねねは一応あの陳宮なわけだし)

自分がこことよく似た世界で「呂奉先」という人物に仕えていたということ。

黄巾はすでに滅び「張角」たちはすでに死んでたこと。

呂奉先や張角たちは男であつたこと。

「曹操」に攻められ主が捕らわれた後、敵軍に突っ込み討ち死にしたこと。

そして気が付いたら、あそこに寝ていたこと・・・。

どうやらここは、俺がいた世界より少々過去の時代らしいこと。

自分で話していてなんだけど、普通信じられないよなあ・・・。

打ち明けたの早まつたかな? と思っていたが

意外なことにねねが真面目に聞いてくれた。

ちなみに恋は話しは真面目に聞いてくれたが、終始「???」だった・・・。

「うっ、ん、正直信じがたい話なのです。が、嘘を言ってるのも思えないのです。」

まあ、いきなり信じろっていうほうが無茶だよね。

「仕方が無いです。洛陽についたら皆に相談してやるですぞ。」

「一応命の恩人ですからな」

とちよつと照れながら言ってくれた。

おお・・・意外といいやつだ・・・ちよつと感動した。

洛陽への道すがら、2人とはいろいろな話をした。

恋は現在「董卓」に仕えていること

董卓は優しくて（とても信じがたいが）民たちに好かれてること

恋には家族（拾ってきた動物達）が沢山いること

恋と陳宮の出会いなど色々聞かせてもらった。

逆に俺は向こうの世界の殿や陳宮のことを聞かせてやった。

恋は興味なさげだったが、ねねが興味津々な感じで聞いてきた。

話している内に、感傷っぽくなったのは秘密だ。

そんな話をしている内に「洛陽」の街が見えてきた。

さて、これからどうすべきか考えなくちゃいけないな。

懐かしい都を見ながら今後どう行動すべきか思考していた・・・。

S i d e : 恋

高順・・・。

なんだが懐かしい感じがする・・・。

なんだろう。

???

わからない・・・けど・・・

あつたかい・・・お日様と同じ匂いがする・・・。

ぽかぽか。

・・・。

眠くなつた・・・。

第六話 仕官（前書き）

この話しもタイトル変更しました。

第六話 仕官

SIDE：高順

洛陽に着いた俺は、恋達と共に謁見の間に通された。

そこには「董卓」を名乗る可憐な少女と、「賈馱」を名乗る眼鏡をかけたきつい印象の女の子が待っていた。

（もう慣れてきたが、やっぱり女の子だったか・・・）

と考えていたら

「恋さん、ねねちゃん黄巾の討伐おつかれさまでした。」

と董卓が2人にねぎらいの言葉をかけたあと、

「それと高順さんといいましたね？このたびはねねちゃんを助けていただき、ありがとうございます。」とこちらに頭を下げてきたので

「いえいえ、偶然居合わせただけですよ。そんなにかしこまられちゃうと恐縮しちゃいますよ」

と少々照れてしまった。

「僕の名は賈馱、董卓軍の軍師を務めてる」
と今度は賈馱が話しかけてきた。

「ねねや恋から話しは聞いた。君が真名を受け取ったことも、それから別の世界から来たらしいという話も」とやや憮然とした表情で

こちらを見る。ありや信じてないな。まあ当たり前だけど・・・。

「ねね達の話だけじゃ判断できないし、君からもう1度話を聞かせてもらえないかな？」

と言われたので、恋達に聞かせた話をここでもう一度話すことになった。

・・・

・・・

・・・。

「うんさすがに信じがたい話かな・・・」

話を聞いた後、賈馱は腕を組みながら呟いた。

まあそうだよな・・・。

「だけど、嘘にしては突拍子も無い話だし、そんな嘘をついたって君に得があるわけじゃないと思う。」

「それに恋さんやねねちゃんが真名を預けるくらいの人だもん。私は信じるよ」

と賈馱の言葉を受け継いで董卓がそう言ってくれた。

「うん、だからその話しが嘘か真かはとりあえず置いて、これからのことを聞きたいんだけど？」

と賈馱がこちらに視線を向ける。

「これからのこと？」

と俺が疑問を投げかけると

「そう、君は行く当てが無いんでしょ？さっきの話が本当だとしても、帰る方法とかわからないんだよね？」

それもそうかと俺は頷く。

「じゃあ君はこれからどうするつもりなの？」

これからのことが・・・。

そのことについて考えなかったわけじゃない。

向こうの世界で討ち死にした後、どうしてこの世界に来たのか、どうやって来たのかサッパリわからない以上、帰る方法も思いつくわけ無い。第一向こうの世界に万が一帰れたとしても、すでに死んでいる身、そして何より殿のいない世界に未練などない。

ならば奇跡的に受けた第二の生。

この世界で精一杯生きてくべきだろう。

幸いこの世界で最初に恋とねねに出会い、ここまで親身になってもらえた。ならばこの恩を返せる形で生きて生きたい。

「出来ましたら恋、いや呂將軍の部下として雇ってもらいたいと思います。」

と恋に向かい

「この世界に放り出された自分を、あなたは怪しむでもなく信じてくれた。」

そして武神とも言つべきあの武、あの武に惚れました。

出来ましたら不肖な俺ですが、あなたの部下にしてください。
俺のすべてを捧げあなたに絶対の忠節を尽くします。」

と地面に伏し頭を下げた。

「ふーんなるほど、こいつはこいつ言ってるけど恋はどう？こいつを部下にしてもいいと思う？」と賈馱が恋に聞くと

こくりと頷いたあと

「高順・・・いい人・・・それにあったかい・・・ねねや月、詠と同じ匂い・・・」

と恋が言った。

意味はわからないが、了承してくれたらしい。

「恋がいいというなら、部下にしてもいいと思うけど、一兵士としてならともかく武将として雇ってほしいなら、君の実力を確かめさせてもらいたいんだけど」

それはそうだと俺は承知した。

「で、どうすれば？」と聞くと
そうね、と賈馱は多少考えた後

「演習というわけにもいかないから、一騎討ちで実力を見せてほしいんだけど？」

「いいですよ。相手はだれです？」と聞くと

「恋と真剣勝負というのはどう？」と爽やかな笑顔で言ってきたので

「お断りします！」と迷い無く返事を返した。

あの恋と戦って勝てるどころか無事ですむわけないだろ！

「詠ちゃん、それはいくらなんでも無理だよ。あの恋さんに一対一で勝てる人がいるとは思えないもん。」

「わかってるわよ月。冗談よ冗談」

と董卓に笑いながら答える賈馱。

おのれ。。

「冗談はともかく徐栄か胡軫にでも相手をしてもら「ちょっとまった！」・・え？」

賈馱の言葉を遮り武將らしき女の人が、現れた。

「その役目この「華雄」に任せてもらおうか！」

まゝた女になってるのね。。

第六話 仕官（後書き）

なるべく早く修正したいので、それまでは短めになっちゃうかも・。
・。

第七話 一騎討ち（前書き）

これで修正は終わります。

第七話 一騎討ち

「その役目、この華雄に任せてもらおうか！」

そんな声とともに大きな斧を担いだ武将が現れた。

S i d e : 高 順

あれが華雄か・・・。

たしか反董卓連合のときに、？水関であの関羽に斬られたんだっけな。

だがその時は、挑発で頭に血が上ってたらしい、本来なら一流の武将と聞く。

強敵だな、そう思いつつも久しぶりに血がたぎってくる。

武人の性とはつくづく度し難いな・・・。

「華雄か・・・。君はそれでかまわない？」
と賈馱が聞いてくる。

「ああ、構わないよ」と華雄を見る。

「恋に仕えると言うことは、董卓軍に所属すると言うこと、我が軍に弱将はいらん」

と言いつてくる。

「強いかわいかわいやってみればわかること、そちらこそがっかりさせないでくれよ」
と挑発しとく。

「さて練兵所へ案内してもらおう」
と頭に血を上らせてる華雄を無視して、さっさと移動した。

S i d e : 華雄

おのれ、この私をなめおつて・・・。
あのような男が強いはずない。
見ておれ、腕の1本でも叩き斬つて命乞いでもさせてやる。
クック・・・。まあ赦しはしないがな。
この私を虚仮にするとどうなるか、思い知らせてから地獄に落としてくれる。

S i d e : 高順

「さてと」
先ほど貸してもらった槍を2、3度振り、感触を確かめる。
少々軽いがまあなんとかなるだろう。

華雄將軍は、先ほどからこちらに殺気を放ちまくってる。
ちよつと挑発がすぎたかな。

「それじゃあ二人とも準備はいい？」

と賈馱が聞いてくる。

「いいなら始めるけど、これはあくまで試験だからね。わかつてるわね？特に華雄。」

華雄は頷くけど、殺気は増すばかりだ・・・ぜってーわかつてねえな・・・。

「それじゃあ、両者とも・・・始め！」

賈馱の声とともに華雄が突っ込んでくる。
想像以上の速度だ。

「死・ね・え・！！」

という聞きたくない言葉とともに、放たれる一撃を紙一重でかわす。

あぶねえ・・・殺す気満々だな・・・あいつ・・・。

俺はかわした体勢のまま槍を操り、華雄の胴を横薙ぎ一閃！

だが、槍先が薙いだのは、残像のみ。振りぬいた槍先に手ごたえはなかった。

「やるなあ」

素直に華雄の力量に感心する。

世間じゃ猪武者と比喻されてたが、すばらしい武力だ。

「貴様もな、まさか槍先を使って薙いでくるとは思わなかったぞ。」
と華雄が、口元を歪める。

「ハアッ！」

気合一閃、華雄は大地を蹴り己の武器である巨大な斧をおれに向かって叩きつけてくる。

確かに速度とあの巨大な大斧を振り回す力、それに反射的に攻撃をかわす勘はすばらしいが、ちよつと攻撃が一边倒すぎるな……。そこに付け込む隙があるな。

「ゴォッ！」

風きり音がし、虚空が裂ける！

華雄が俺を叩き潰そうと斧を叩きつける。

しかし今度は余裕を持って、紙一重でかわす。

華雄の攻撃は確かに鋭いが、叩きつけるか横薙ぎの二種類しかないのだ。

おそらくこれまでの敵は、一、二激で倒せたのだろう。だが真の武人相手にはこんな戦い方は通じない。

華雄の一撃かわした俺はすばやく懷に飛び込み、槍を返し持ち手の部分で華雄の鳩尾を突く。

「グッ！」

うめき声を上げ、膝を突いた華雄の目先に槍先を突きつけて

「勝負ありかな」

と声をかけた・・・。

Side: 詠(賈馮)

「それまで！」と声をかけながら、僕は考えてた。

(へえやるじゃない、猪とはいえあの華雄相手に圧勝だなんて・・・)

これは使えるかもと僕はほくそ笑んでいた。

最近は十常侍とか、周りが不穏になってきてたからね。
月を守るためにも頼りになる味方は多いほうがいい・・・。

出来れば信頼の置ける「仲間」になってほしいと、僕は密かに考えていた。

第七話 一騎討ち（後書き）

次回からは続きを書けます。

話し自体大幅に変わってしまい
真に申し訳なかったです。

第八話 華雄改造計画 その1

Side：高順

華雄との模擬戦をえて正式に任官された俺は、恋の副将として一部隊を率い各地での黄巾賊の征伐に参加した。

黄巾賊は数こそ膨れ上がっていたが、それを纏め上げることのできる指揮官が不在なため、徐々に各地の有力な諸侯の軍に制圧されていた。

そんな中、黄巾賊の指導者「張角、張宝、張梁」の三姉妹が曹操に討ち取られたとの知らせが入った。

これにより黄巾賊の乱は収束を見せていった……。

洛陽――

「おお高順、帰ってきたか！早速私と勝負しろ！？」

黄巾賊の討伐の任から、洛陽に帰還した俺を出迎えた第一声はもはや聞きなれた声だった。

任官のときの模擬戦が氣にくわなかったらしく、華雄はことあるごとに再戦を申し込んできた。

それは構わない、というか華雄にはこの後「起こりうるかもしれない

い戦い」のことを考えると武将として成長してもらわなければ困る。

だが何度やっても、どう説明しても華雄は猪なのである。

「挑発だと分っていて、挑発に乗るのは馬鹿のことだ」

と言い含めてから挑発してみても見事に挑発に乗るし

「ただ力任せに武器を振るうだけじゃあ、一端の武人には当たらんもつと虚実を含めた戦い方をしないと。」と言っても力任せに斧を叩きつけるだけなのである。

ようするに成長がないのであるが、そこを指摘しても

「私の武を愚弄するか！！」

と逆切れされる始末である・・・。

はてさてどうしたものか・・・。

S i d e : 華雄

ふん、また高順のやつが私の戦い方についてガタガタと抜かしおつたな。

確かに私の戦い方は、力一辺倒なのかもしれない。

だが、私はこざかしい手で戦おうとは思わん。

鍛え抜かれた己の武を、敵に真正面からぶつけて力で粉碎する。

それこそが武人の本懐よ・・・。

見ておれ、いずれ貴様も恋もすべての武人をも超えて私の力を見せ付けてやるわ！

S i d e : 高順

とりあえず華雄をどう鍛えたもんか考えても答えが出ないので、皆に相談しようかと探してたら恋が見つかった。

恋の戦い方は、生まれ持った天性の勘や力で戦っているので、鍛えるという概念があるわけではないので、参考にはならないかな？と思いつつ聞いてみると

「・・・」

と可愛く首を捻った後

「・・・あるよ」

と言った。

「あるって華雄を鍛える方法？」
と聞きなおすと

コクつと頷いた。

「おおーそれはどんな方法かな？」

と聞いた俺に恋が耳打ちしてきた

（そんなに顔を近づけてきたら照れまする／＼／）

恋が語った作戦とは？
後編に続きます。

第八話 華雄改造計画 その1（後書き）

本来1本のはずでしたが、長くなりそうなので複数話になりました。

第九話 華雄改造計画 その2（前書き）

P Cの調子が悪くて投稿遅れました。

第九話 華雄改造計画 その2

Side：華雄

「えゝではこれから一月の間、3日ごとに各部隊総当りで模擬戦を行います。」

朝議の後、前將兵が招集され今後の調練が高順から発表されたが、その内容を聞いた後皆からざわめきが起こった。

それはそうだろう、今まで集団での模擬戦など多くても、月に2、3度あるかどうかだったのに、3日に1度など多すぎだろう。

いくら黄巾がほぼ制圧されたからといって、まだ予断は許される状態ではないだろうに。

「といつても一度の模擬戦に全將兵が参加するのではなく、守備部隊を除いた各部隊直属の兵士1万を10小隊に分け、各小隊に1度づつ参加してもらいます。」

なるほど、あくまで守備部隊は参加せず各部隊も一度に参加する人数は10分の1というわけか。それなら問題はないのか。

「もちろん、各部隊の將軍は全試合に指揮官として参加してもらいます。」

おもしろい、高順はもちろん恋達ともやりあえるわけだな！くくっ見ておれ高順め今までの借り十倍にして返してくれるわ！！

Side:高順

「もちろん、各部隊の將軍は全試合に指揮官として参加してもらいます。」

うわゝ華雄さんたらやる気満々ですよ、殺氣がただ漏れてますな。高順め、今までの借り返してくれるゝってところですか。でも終わったあとでも同じことが言えますかね？

「なお、全試合終了後もつとも勝率の高かった部隊には報奨金として来月の給金が倍になります」
ウオオオゝツ！！

「で、もつとも成績の悪かった部隊は給金半額です」
ブウウゝツ

「さらに部隊の將軍は一ヶ月間全施設の便所掃除当番をやっています。」

「ちょっと待て！！」

「何ですか？華雄さん？」

「何だその便所掃除ってのは、武人たる者のやることか！」

「負けなければいいんですよ？それとも華雄さんは自信がないとか？」

「そんなことは言っていない！だいたい訓練内容といい、給金のこと
といいお前が独断で決めていいはずがないだろうが！」

「ああ、それでしたら賈馱さんには許可をもらいましたから」

「なんだと！」

「決定事項なので異義は受け付けません。第一戦は2日後からで
すので、それまでに組み分けとかしといて下さいね。」

華雄がまだ文句を言ってるようだが、聞き流して俺は高順隊の所へ
と向かった。

数刻前――

S i d e : 賈馱

「で、大事な話して何よ高順？」

僕は高順から今後のことで話があると、呼び出されていた。

「うん、黄巾賊の乱も首領の張角たちが曹操に討ち取られたことで、
平定も時間の問題となった」

「そうね、で？」

「そうなるこれからこの大陸はどうなっていくと思う？」

僕は少し考える素振をして

「漢王朝の衰退は誰の目にも明らかになってしまった悔しいけどね。もう諸侯を抑えることは難しくなるでしょうね。これからは諸侯同士が覇を競い合う、群雄割拠の時代になっていくでしょうね・・・」

「

溜息混じりにつぶやいた。

「そうだな、そしてそうなると現在洛陽を制している我々も巻き込まれていくだろうな」

そうね高順の言うとうりだ。

「ええ、月がいくら争いを望まなくても、月に対して嫉妬や反感を持つものが多くいるだろうからね」

「ああ、だからこそみんなを守るためにもやれることをやっていこうと思うんだ」

「そうね、で具体的には？」

「まず諸国に対しての間諜を増やして情報収集だな。それと兵士の訓練を増やして錬度を高めよう」

「幸い洛陽周辺は黄巾の被害がほとんどないし、城の備蓄は十分だ、それに？水関、虎牢関の難攻不落の塞もある。」

「ええ、あの塞で籠城策を取ればそう簡単には突破されないと僕も

思う、ただ」

「そう、ただ、なんだよな。うちの武将は猪ばっかだから・・・。」

「ええ、素直に籠城してくれるとは思えないはね・・・。」

『とくにあいつがな（ね）』

はあ〜と二人同時に溜息をつく。

「そこで俺に考えがあるので、ある許可を貰いたいんだ」

「ある許可？何？」

「実は・・・。」

閑話 恋さんといっしょ(前書き)

最近出番のない恋の番外編です。

閑話 恋さんといっしょ

恋さんの1日

朝、お腹がすいて起床、恋さんの腹時計は二ワトリさんより早起きだ

グウウウ

「朝、お腹すいた、ちんきゅごはん」

「はいですぞ恋殿」

朝ごはんを食べたら、軽く睡眠をとる。恋さんは食べてすぐに寝ても牛さんにはならないのだ。

「眠い、ちんきゅ、おやすみ」

「ねねも一緒に寝ますぞ、おやすみなさい恋殿」

軽い睡眠の後は犬と散歩だ。恋さんは運動もちゃんとするぞ。

「セキト、あんまり先にいっちゃだめ」

「あんあん」

「待つてくださいー恋殿」

運動の後はお昼ご飯だ。午前の仕事を終えた、高順と一緒にとるぞ。恋さんは部下とのコミュニケーションもばっちりとるぞ。

「もふもふ・・・」

「恋、これもおいしいぞ食べるか？」

コクコク

「恋殿にあんまり慣れなれしくするなです、ちんきゅつきつくー！」

「ちんきゅうるさい」

ポイ

「恋どのーー」

お昼ごはんの後は、お昼寝の時間だ。恋さんは食べて以下略

「ぽかぽかしていい匂い」

「こらゝ月の膝で寝るなんて、羨ましいことじゃなかった、月の仕事の邪魔をするんじゃない」

「だ、大丈夫だよ詠ちゃん。全然邪魔じゃないから」

「うつ・・・月にはきつくてできないのです・・・」

お昼寝の後は街の警邏だ。いろんなお店の人とコミュニケーションを

とるぞ。

「よ、呂布ちゃん新しい肉まんが出来てるぞ、食べてくか？」
コクコク

「あらー呂布將軍、うちのお菓子も食べてっておくれよ」
コクコク

もちろん支払いは我らが高順將軍だ

「おら、さつさと支払うがいいです」

「トホホホ・・・」

警邏が終わったらオヤツの時間だ。沢山仕事したから沢山食べるぞ。

「もふもふ」

「ささ、恋殿、こちらも食べるですぞ」
コクコク

「ああ、恋、口の周りが食べかすで汚れてるぞ」
ふきふき

「ありがと高順」

「ああ、恋殿に対してなんと羨ましいじゃないか、馴れ馴れしくするな」
「です。ちんきゅうさんだんきつ・・・」

「ねね、うるさい」
ポイツ

「恋どのー」

オヤツを食べたら午後の犬との散歩だ。暖かい日は川までいってお風呂（水浴び）だ。

「セキト気持ちいい？」

「きゃんきゃん」

「あ、ちゃんと洗わないとだめ・・・。」

「くうん」

「うん、いい子」

「はあはあ、恋殿、恋殿・・・」

散歩が終わったら、夕ご飯だ。仕事が終わった仲間達と食べるぞ。恋さんは皆と食べるご飯が大好きだ。

「ほれ恋、これも食べるか？」
コクコク

「よっしゃ、沢山食べ」

「恋さん、こちらもおいしいですよ、よかったです」

コクコク

「月のぶんまで食べるな」

「い、いいんだよ詠ちゃん、私こんなに食べれないし・・・」

「もう月はやさしいんだから」

「ほら恋、急いで食べるとまた口の周りが汚れるぞ」
ふきふき

「ん、ありがと高順」

「いちゃいちゃするなですく反転ちんきゅっきゅー!」

「ちんきゅ邪魔」
ポイッ

「恋殿ーーーー」

ご飯を食べたら就寝だ。恋さんは早寝早起きの規則正しい生活を心がけてるぞ。

「お腹いっぱい・・・眠い・・・ねね・・・おやすみ」

「はい、おやすみなさいですぞ、恋殿」

こうして恋さんの一日は平和に終わってく。

明日はおはよう〜今日はおやすみ・・・。

「って仕事しなさいよーあんた達ー！ー！」

閑話 恋さんといっしょ（後書き）

次回は本編の後半の予定

華雄の真名はあったほうがいいか、ないほうがいいか考え中
意見ありましたらお願いします。

そういえばまだ恋とねねとしか真名交換してないや・・・。

第十話 華雄改造計画 その3（前書き）

お久しぶりです。リアルが忙しすぎて投稿時間が取れませんでした。がやっと時間が取れたので久々に更新です。

8月はある程度更新出来るはず・・・。

第十話 華雄改造計画 その3

Side:高順

「・・・正面の本隊は敵部隊を牽制、ただし無理に戦わなくていい、敵をいなしながら少しづつ後方へ下がれ。」

現在我が高順隊は、華雄隊との3度目の模擬戦中。1度目は落とす穴に誘い込み、2度目は敵部隊と華雄を引き離し、みんなで囲んで袋叩きにした。

いやゝ予想通りと言っかなんというか、罠があるよゝと事前に教えていてこれだ。

どうせ、『罠など食い破ってくれるー!!』とか言っつて突っ込んできたんだろつな・・・。

もちろん華雄は激怒しましたとも

『卑怯者め！正々堂々と戦えないのか!!』とね。

あれほど実戦形式だと言ったのに・・・。

「よし敵の戦列が伸びきった！左右両翼の伏兵で横撃をかけろ」
無防備な横っ腹を突かれた華雄隊は混乱し、収集がつかなくなっている。

「よし敵は混乱してる、本隊も後退は中止突っ込むぞ！」

さていい加減学習してくんないかな。

S i d e : 華雄

く、またも姑息な手段をとりおつて、こんな策に頼った戦い方しか出来んのかアイツは！

認めん、こんな戦い方で勝ったなどと、私は認めんぞ！

S i d e : 高順

模擬戦終了後、部隊の撤収準備をしてると、華雄が怒りを露にしなからやってきた。

「貴様は3度とも逃げ回ってただけじゃないか！正面からやれば私が勝っていたのだ」

うわゝついに負け惜しみまでいいだしましたよ、この人

「華雄將軍、この模擬戦は実戦形式だと言いましたよね？あなたは実戦でも敵が策を弄してきたら『卑怯者』と罵るおつもりですか？」

「ふん、小癩な毘など噛み破ってくれる。」

「しかしあなたは我が部隊に3度とも敗れてますよ？」

「あのような小賢しい戦い方など、武人としての矜持を持たぬ腰抜けのすることよ。武人たるもの己の武を示さんがため正々堂々と戦い抜くものよ。たとえそれで敗れたとしても悔いなど残らぬわ！！」

あれ？

つまりこいつは自分の矜持が保たれれば、守るべき主や指揮すべき兵がどうなってもいいと言う訳なんだ。

なぐんだ、つまり俺が今まで華雄の為にやってきたことって、全部無駄じゃないか。

「あはははははっ」

突然笑い出した俺に華雄や周りの兵たちも顔をしかめる。

「と、突然なんだ笑い出しおって」

「いやゝ自分の馬鹿に呆れてしまって、いいだろう、模擬戦の結果が納得いかないというのであれば一騎討ちで決着をつけよう。お望み通り正面から全力全開で戦ってやるよ。」

と愛用の槍を持ち、模擬戦場に向かう。

「面白い、正面から戦って私に勝てると思ってか、我が金剛爆斧の錆にしてくれるわ！」

と華雄も続いてきた。

『お前はこんな馬鹿な主に付き合うことはない、生きて名を残せよ
高順……。』

・・・殿

S i d e : 霞（張遼）

お、なんやあいつら模擬戦が終わったばかりやというのに、まだやるんかい。

せやけどなんやいつもと様子が違うな。高順のやつあんなに殺気を
出すようなやつだったかいな？

「お、恋とねねやないか、二人も見物かいな？」

と声をかけたが恋のやつじつと二人のほうをみとる。

ここもいつもと違うんかいな？とおもったたら

「高順、怒ってる」

と恋がぼつりと呟きおつた。

怒ってる？なんやあつたんかいなと考えてたら二人の戦闘が始まった。

Side：高順

「さてと今回は挑発も小細工も抜きだ。真正面から誇りだか矜持だかつてもんを叩き潰してやるよ」

そついいながら槍を水平に構える。

「後々言い訳できないように、全力ですべての武をこめた一撃でこい！」

その驕りを矯正してやるよ。死ななかつたらな。

「叩き潰すだと？小賢しい策でしか戦えないような貴様など、この一撃で肉塊に変えてくれるわー！！」

凄まじい勢いで武器を振り下ろす華雄。

だが避けない、守るべき者を持たない者の一撃など、避ける必要もない。

俺は構えた槍を華雄が振るう金剛爆斧を無視して、華雄に叩き込む。

S i d e : 霞（張遼）

高順のやつ、華雄の放つ一撃を無視して槍を放ちおった。

華雄の一撃が無防備な高順の頭を直撃する。

「あ、あかんあれは立ってられへんやろ・・・。」

だが高順は華雄の一撃を意にも関せず、逆に華雄を槍でふっ飛ばしおった。

「なんちゆう無茶をするやつちゃ・・・。」

高順は華雄の一撃を食らって頭から流血しとるが、立っておる。

逆に華雄は今の一撃で気失ったようや。

「高順のやつ、あないに強かったんかい・・・。」

こりゃあ、是非にうちとも本気やりあってもらわんな。

武者震いをしながらそんなことを考えていたが、ふと恋のほうを見たらまだ悲しそうな泣き出しそうな顔をしとった。

「どないしたんや恋？もう終わったで？」

うちがそう声をかけると、恋はゆっくり高順たちのほうへ歩いていった。

S i d e : 高順

俺はゆっくりと華雄のもとへ向かう、華雄の一撃を防御もなしに受けたおかげで目が霞む。

「ちと無茶がすぎたかな」

血が流れすぎて、頭がぼーっとする。

華雄の元にたどり着くと、華雄がわずかに身を起こそうとした。

どうやら意識を取り戻したようだ。

逆に俺は意識が飛びそうだが、その前にこれだけは言っておかなければ

「華雄、お前にとって1番大切なのはなんだ？己の武を天下にしめすことか？それとも守ると決めたものを守り抜くことか？お前にとつての強さとは、董卓殿や洛陽の民、それにお前を慕ってついて来てくれる部下の命を守ることよりも武を示すことだと言っなら、そんなのは本当の強さじゃない、そんなのは『匹夫の勇』にすぎん。少なくとも俺はそう思う。」

それだけ言つと立っていることが出来ず、後ろに倒れこみそうになる。

ポスッ

すると誰かが俺を抱きとめてくれた。

「・・・恋」

「高順・・・無茶しすぎ・・・」

恋はキュッと軽く抱きしめてくる。

「ああ、心配かけてごめんよ、だけどあのままじゃ華雄はいずれ戦死してた。それも味方を巻き込んで。そんなことになったら董卓殿が1番悲しむ。あの人の泣き顔は恋も見たくないだろ？」

こくつと恋は頷く、だが

「けど・・・高順が怪我したら恋が悲しい・・・」

そっいつて強く強く俺を抱きしめてきた・・・。

第十話 華雄改造計画 その3（後書き）

そろそろ反董卓連合編に入ります。

決着どうつけるか、まだ考えてなかったりしてw

第十一話 絆（前書き）

真名交換イベント

でもまだ全員とは・・・。

第十一話 絆

S i d e : 高順

華雄との一騎討ちから10日余りたった。

俺の怪我もほぼ完治し、部隊の訓練の指揮も取れるようになっていた。

あれから華雄は少しづつだが、変わりつつある。

それまでの、直情的な性格はなりを潜め、少々の挑発では動揺しなくなってきた。

それはいい傾向なのだが、どうも落ち込んでいると言つか、考え込むことが多くなった気がする。

あの時言い過ぎたかな？と思い、華雄と話しをしてみることにした。

S i d e : 華雄

「・・・ふっ」

今日の訓練が終わり自室に帰った私は、ふと溜息をついていた。

『お前にとって大切なことは、守るべき者を守ることか、それとも己の武を天下に示すことか！』

あのととき高順に言われたことが、また頭の中で反芻する。

幼い頃、両親を失い天涯孤独になった私は生きる為なんでもやった。

盗賊紛いのこともしたし、罪なき者を傷つけもした。

ただ意味のない毎日を繰り返してただけだった。

そんな私を闇の中から救い、生きる意味と武という生き甲斐を与えてくださったのが月様だった。

出自も分らぬような私を認め、真名まで預けて下された。

そして私に真名がないと分ったとき、侮辱なさる所かご自分が考えた名を私の真名として与えて下された。

あの時私は誓ったはずだった。

『これからは月様のために生きよう、あの方の笑顔を守る為に戦おう』と・・・

なのに私はそんな大切な誓いさえ忘れていたのか・・・。

「ふつ滑稽だな私というやつは、猪と比喻されても当然だな・・・」

そんなことを呟いていた私を呼ぶ声が部屋の外から聞こえた。

Side：高順

「華雄、いるのか？少し話があるのだが」

会ってくれるか多少心配だったが、華雄はすぐ呼びかけに応じてくれた。

「……入れ」

覇気のない声でそう言い、俺を部屋へと招き入れてくれた。

「……それで何の話だ？」

目もあわせず華雄は話を促してきた。

「……この所、元気がないようなのでな。心配になってな」

「心配？」

「ああ、この前の模擬戦のときの俺との一騎討ちが原因なんだろう？」

「……」

「あの時言ったことは、間違っていないつもりだが、俺も少々頭に血が上ってたからな、言い方が悪かった。」

「だがな、華雄「ふっ」……？」

話しを続けようとした俺を華雄の苦笑いが止める。

「お前は間違ってないさ、すべて私が愚かだったのさ」

その表情には苦悶ではなく自暴自棄が浮かんでいた。

「お前に言われた後、私はずっと考えていた・・私が守りたかった物はなんだったのか・・私が武を高めんとしたのは何の為だったのか・・」

華雄の顔が悲しみに染まる。

「すべては月様の為だったはずだったのにな・・。いつから私はそんな大切なことを忘れてしまったのだろう・・。」

・・あれ？いい傾向に進んでると思ってたけど、今度は考えすぎて負の螺旋に嵌っている？

確かに猪突猛進もこまったもんだが、考えすぎるなんて華雄の個性じゃないだろ？

たく、ほんと世話が焼けるぜ。

俺は拳を握ると華雄の頭に思いっきり拳骨を叩き込んだ。

ゴンッ！！

「・・ぐ、ぐわああ・・な、何をする？」

涙目になりながら抗議する華雄に向けて俺は怒鳴りつける。

「あのなあ！なにを落ち込んでるんだよ？落ち込む必要なんて何もないだろう？」

「・・・何？」

わからんと言う顔になる華雄

「お前はまだ何も失ってないだろ？その前にちゃんと気づいたろ？」

「・・・う」

「お前は董卓殿を守りたかったのだろ？そのために強くなろうと決心したんだろ？」

「だ、だが私はそのことすら忘れて」

「でもちゃんと思いついたろ？」

俺は華雄の両肩を掴み真正面からその瞳をみる。

心なしに華雄の顔が赤く染まっているがこの際無視だ。

「だったら今度こそそのために強くなればいいじゃないか・・・失ってから後悔したって仕方ないんだ」

俺は一度主君を失っているのだから・・・。

「お前・・・」

華雄の瞳がこちらを見返す。

「だから１度失敗したくらいで立ち止まるな。もしまた忘れそうになつたら俺が力ずくで思い出させてやる！」

そう俺は今度こそ、恋と恋の大切に思っているすべてを守ると決めたのだから！

「ふ、そうだな１度の失敗で立ち止まつてる暇など私にはなかったな」

華雄の瞳に力が戻る。

「礼を言おう高順、私に大切なことを思い出させてくれて、そして誓おう私は最後まで大切なものを守り通すと！」

華雄の声に自信と覇気が戻った。もう大丈夫だな。

「じゃ、俺はこれで失礼するよ」

と部屋を辞そうとしたが

「待て」

と華雄に引き止められた。

「高順、私の真名を預かって貰えないか？」

「いいのか？」

華雄は頷きながら

「ああ、私に大切なことを思い出させてくれた礼と、信頼出来る友として是非受け取ってほしい」

「分った」

「我が真名は『美命』（ミコト）真名がなかった私に月様が下された名だ。これからはこの名で呼んでくれ」

「わかった俺は真名も字もない、今まで通り高順と呼んでくれ」

この日、俺と華雄は本当の意味での戦友^{とも}になった。

その後、華雄を美命と真名で呼んだら張遼が

「なんやてゝ華雄のやつが真名を高順に預けたやてゝ」と大袈裟に驚いて

「ウチかて華雄の真名預けてもらってないのに」と落ち込んだ

なんでも華雄は董卓殿以外に真名を預けたことがないらしい。

「それにまだ高順にウチ真名預けてなかったわ……。ウチかて高順のことは気にいってんのに」

といって真名を預けると言ってきた。

「いいのか？そんなに簡単に真名を預けて？」

「簡単やあらへん。あんたのことは実力も認めてるし大切な仲間だと思ってる」

と真面目な顔で言ってきたのでありがたく預かることにした。

「ウチの真名は『霞』や改めてよろしくな」

「こちらこそよろしく、俺のことは今まで通り高順で」

こうして霞とも真名を預けられ、絆を強くした。

ちなみにここしばらく華雄に構いっぱなしだったせいで、恋の機嫌がものすごく悪かったです。

「高順・・・華雄と遊んでばっか・・・恋と遊んでくれない・・・」

「いや遊んでいたわけじゃないんだけどね・・・」

第十一話 絆（後書き）

次回、いよいよあのイベントの発生です。

あの馬鹿を筆頭に、原作キャラ多数登場予定

第十二話 反董卓連合 その1

黄巾賊討伐から2ヶ月

ある凶報が大陸全土を駆け巡った。

漢王朝滅亡への序章・・・

後漢王朝第十二代皇帝霊帝崩御。

仮にも漢王朝を支えてきた霊帝の死により、王朝崩壊の足音が加速度的に勢いをましたのだった・・・。

S i d e : 高順

「みんな集まったわね」

と、賈馱が周囲を見回しながら言った。

現在賈馱により主だった武将が集められている。

「さっそくだけどみんな今回の事件のことは聞いたわね？」

今回の事件・・・

霊帝の死後、その後継者争いによって大將軍である何進と十常侍の間で確執が起き

何進が十常侍に暗殺され、その敵を討つべく何進の副将の袁紹に十常侍は討ち取られた。

その混乱の最中、霊帝の後継者たる少帝弁が十常侍の筆頭である張讓に暗殺されたのである。

「張讓は月の命ですでに討ち果たした。皇帝の座については、とりあえず少帝弁様の妹君であらせられる、劉協様についていただくことになったわ。」

他に後継者がいない以上、そうなるな。

「宦官たちも十常侍を筆頭に一掃したし、この機に宮中に巣くう寄生虫の類も排除した。・・・ここまではよかったんだけど・・・」

と、賈馱は言葉を詰まらせた後

「月が今回のことで帝の覚えが良くなった事を気に食わない袁紹が、董卓さんが洛陽を制圧して帝を蔑ろにし、好き勝手に政治を行ない民を苦しめてるから皆さんで退治しますわよ、オホホッ」なんてでっち上げの檄文を諸侯に流したのよ！」

と、興奮した賈馱は机を叩きながら顔を真っ赤にし叫んだ。

目が血走ってるなあ、怖ええ。

まあ気持ちは痛いほどにわかるなあ。

「しかし頭の悪そうな檄文やな。これじゃあ真実もわからんだろうし諸侯は動くんかいな？」

と、霞の疑問に

「動くでしょうね・・・。」

と冷静になった賈馱が答えた。

「見る目のある諸侯なら、この檄文がでっち上げだって気づくわ。でもこれは名声を得るまたとない機会、野心ある者なら参加するでしょうね。」

と溜息混じりに呟く。

確かにこの後に確実にやってくるだろう群雄割拠の時代に備え、野望ある諸侯ならこの好機を逃すまいとするだろう。

まあ発起人の袁紹は董卓殿に対する嫉妬から檄文を発したのが見え々だが・・・。

「それでどうするのだ詠？」

それまで黙っていた美命が、賈馱にたずねた。

「意外やなあゝ華雄っち。てつきり『月様に対してこの様な濡れ衣を着せるとは！この私が全員叩き斬ってくれるわ！』とか言って今にも飛び出していくかと思っ たわ」

と霞が美命の言葉に驚きを表す。

「本当は私とてこんな事をした袁紹を今すぐにでも叩き斬りたい。^{バカ}

だが私がここで激情に駆られては、月様をお守りすることは出来ん。残念だが私は頭がいい方ではない。ならばこの状況を打開できる策を軍師である詠に考えてもらって、私はその策の元、月様をお守りする為全力を尽くすまでだ」

美命は本当に成長した。

一時の感情に振り回されずに、最善の方法を自分なりに模索してる。それに今までと違って、ちゃんと仲間の能力を認め自分に足りないものを補ってもらおうとしてる。

そんな美命を董卓殿が、頼もしげなそれでいて優しげな瞳で見ている。

美命に真名を授けた董卓殿はある意味で美命の母親のような心境なのだろう。

「そうね、まず連合に参加しそうな諸侯を報告して貰いましょう、^{みお}漣入ってきて」

賈馱がそう言っと1人の女の人が入ってきた。

「失礼します。皆さんお久しぶりです。」

「おおー漣やないか久しぶりやな〜いつ帰ったんや？」

「・・・おかえり」

「おかえりなのですぞ、漣殿」

顔見知りなのか、みんなが声をかける。

賈馱といい真名で呼んでる所を見ると親しい間柄らしいな。

「只今戻りました月様、お元気そうで何よりです。」

「澪さんも。長い間のお勤めご苦労様でした。」

董卓殿も真名を許してるってことは、重臣の1人かな？

とりあえず紹介してもらおうと思ったら、なぜか美命が俺の後ろに隠れるようにしていた。

「なあ美命？お前なにやってるんだ？」

と俺が美命の名を呼んだ瞬間、それまで和やかな雰囲気だったのが一変した。

というか、さきほどの女性が恐ろしいほどの殺気を俺にぶつけてきてる。

「き・さ・ま・なぜ貴様のような男が、お姉さまの真名を気安く呼んでる？」

そついいながら斧のような武器を手にこちらへとにじり寄ってくる。

「あつちやくそついえばあの悪癖、高順は知らなかったんや」

と霞が頭を抱えてる。

「え、え？俺何か悪いこと言ったか？」

と戸惑う俺を他所に

「貴様の様な○×　ピーなやつがお姉さまの真名を口にするなど、汚らわしいにもほどがある。死んで詫びよー！！」

と斧を振り上げた。ってちよつと！？

「やめろ漣！」

と美命の一言で斧が振り下ろされる前に止まってくれた。

「しかしお姉さま、この屑は不敬にもお姉さまの真名を！」

「いいんだ、高順には私が信頼を持って真名をゆるしてある」

「そ、そんなこんなでこの馬の骨ともわからぬ○野郎^ビなんか、お姉さまが真名をお許しになるなんて・・・。」

まさに愕然として膝をおとした。

「な、なあ霞、これっていったい？」

「ああ、漣っちは華雄のことが好きやねん。いつもは冷静沈着なやつなんやけどな、華雄のことになるとああなんねん。」

「ああさようで・・・」

また個性的なお姉さんだことで、こんな武將ばかりなのか董卓軍は・

「特に高順は月殿以外で華雄から真名を唯一受けてますからなあ、
濤殿としては許せぬでしょうなあ」

とねねが当然でしょう？とばかりに頷く。

ええゝそんな理不尽な

「ったく濤、今は個人的な私怨は後回しにしなさい。まずは高順と
自己紹介し合いなさい」

時間がないんだからと言う賈馱の言葉に、いやいやながら従ってく
れるようだ。

「しかたがない・・・ほんとに嫌だが1度だけ名乗ってやる」

本当に嫌そうな顔をしながら

「我が名は『徐晃 字は公明』宜しくしてくれんでいいぞ。」

無茶苦茶嫌そうだな。

「それとお姉さまに手を出したら コ・ロ・シ・テ・ヤ・ル・カ・
ラ・ウフフフフ・・・」

ああ、美命が露骨に顔をしかめてる。それでさっきは後ろに隠れた
のね。

「我が名は、高順、呂奉先の一の槍なり 宜しく」

すると徐晃は見下した顔で

「え？あんたが恋の一の槍？馬鹿言ってんじゃないよ、あんたみたいな屑に何が出来ると言っつものよ」

「・・・零」

するとさっきまで黙っていた恋が話しかけてきた。

「高順、強い、」

「え？恋？」

「高順、強いしやさしい・・・馬鹿にしたらだめ・・・」

恋にしては珍しく語尾を強めにした言葉からは、殺気があふれ出てるんですけど・・・

「い、いやあのね恋？」

「・・・高順、傷つけたら、恋、零でもゆるさない・・・」

「・・・」

恋の殺気に当てられて、徐晃が沈黙してしまった。

いや恋、俺のために怒ってくださったのは嬉しいんですが、ちょっと怖いです。

「ああもう、あんた達いい加減にしなさい！話がすすまないじゃないの。」

いい加減に切れかけた賈馱の一言で、二人とも引いてくれた。

やっと軍議が進められる。

こんなことで大丈夫か？

第十二話 反董卓連合 その1（後書き）

長くなりすぎたんでいったん切ります。

オリキャラに文章取られすぎて

話が進まない・・・。

本当なら諸侯に登場していただくまで書きたかった。

第十三話 反董卓連合 その2（前書き）

話しが一向に進まない・・・。

第十三話 反董卓連合 その2

前回までのあらすじ

帝の信任を得た董卓殿に嫉妬した袁紹^{バカ}が、偽の檄文をでっち上げ諸侯を率いて攻めてきました。

S i d e : 高順

「袁紹、袁術、孫堅、曹操、劉表、公孫瓚、馬騰、鮑信、王匡、孔？、劉岱……。聞いてるだけでいやになるわね。」

各地の情報収集を行っていた徐晃により、連合に参加するであろう諸侯の名を聞き賈馱が愚痴つてた。

まあ無理もない。これだけの英傑が一箇所に集まるのは稀だと言うのに、それが徒党を組んで攻めて来るんだもんな。

「で、遷。この中で特に注意すべきなのはどいつかしら？」

「そうですね・・・」

賈馱の質問に徐晃は少し考えた後

「まず北方の雄『袁紹』ですね。当主の袁紹は名門であることを鼻にかけることしか能のない馬鹿ですが、なんといっても兵力が多い、それに部下には顔良・文醜の2枚看板を筆頭に沮授、郭図、淳于瓊

など優秀といえる人材がいます。」

「次にその従姉妹の『袁術』。彼女自身はただの我侬な子供にすぎませんが、問題は客将として袁術に仕えている『孫堅』ですね。黄巾の乱では渠帥の波才の軍を半分にも満たない戦力で一方的に撃破し、その苛烈な戦いぶりから人々に『江東の虎』と呼ばれてるそうです。」

「さらに『曹操』。まだ勢力はさほど大きくはありませんが、部下には猛将や優秀な軍師が多く集まっています。また軍は精鋭揃いで他の軍に比べて練度が違います。」

「他にも公孫賛や馬騰など気になる諸侯がありますが、特に気になったのが義勇軍を率いて参戦するであろう『劉備』ですね。」

「劉備？聞いたことのない名前ねえ」

と、賈馮が疑問を浮かべていたが、

（劉備か、前の世界では我が殿と因縁浅からぬ人物だったな。）

と俺は、前の世界での劉備のことを思い出していた。

「ええ、義勇兵2000人程度の将ですが、配下には一騎当千の将や知略に富んだ軍師が多数仕えています。そして『天の御遣い』と呼ばれる人物が劉備軍に参戦すると言う噂があるのです。」

それを聞いた俺はふと疑問が沸き

「なあ、ねね『天の御遣い』って何だ？」

と聞いてみた。

「知らないのですか？やれやれです。」

と呆れた顔をしたあと

「自称大陸一の占い師と喧伝している管輅という占い師が『流星と共に天の御遣いが降り立ちこの世を太平に導くであろう』と占ったと世間ではもっぱら噂ですぞ」

「もっとも僕は眉唾物の噂としか見てないけどね」

と賈馱がねねの言葉に続ける。

「まあ天の御遣いのことは、今は気にしてもしかたないわ。それで連合の兵力はどのくらいになりそう？」

「そうですね、おそらく20万から30万にはなろうかと」

「30万！うちの軍は守備兵も総動員しても15万がやっとやで・
」。

と霞が声を上げる。

「都を空にするわけにもいかんし、最悪4、5倍の敵と戦わなきゃいけないわけか。いくら塞があるといっても厳しいな」

と俺も渋い顔してしまった。

「とにかく！」

暗くなりかけた空気を振り払うように賈馱が声を張り上げる。

「連合が攻めてくるのは間違いないわ、でも僕らは黙ってやられるつもりはない！」

「月が今日までどんなに民のためにがんばってきたか、僕が一番知っている。」

「詠ちゃん……。」

賈馱の言葉に董卓殿が言葉を漏らす。

「その月をくだらない嫉妬や己の野心で殺そうとするなら、僕が全力で月を守る。そして月に手を出そうとした報いを必ず思い知らせてやる！！」

と、己の決意を伝えるように、董卓殿の小さな手を賈馱が包み込むように握る。

董卓殿もその決意を受け取るようにしっかりと握り返す。

二人の絆の強さが改めて伝わってきた。

そして賈馱がこちらを向き

「でも僕だけじゃ月を守りきれない、だから皆の力を貸して！月と月が大切に思っている者を守る為に」

と頭を深々と下げた。

「な〜に水臭いこといってんねん、うちかて月が大好きやねんで。」

「月様は私にとって一番大切なお方だ」

「・・・月も皆も恋が守る・・・。」

「安心するですぞ！恋殿とねねがいれば問題ないのです」

「月様とお姉さまを苦しめる者は、私の斧で蹴散らしてくれましょ
う！ ついでに高順も（ボソ）」

と皆、即座に答える。一人聞き捨てにならないことをいった気もするが・・・。

「皆さん・・・ごめんなさい・・・私なんかの為に・・・私のせいで・・・」

皆の声を聞き嗚咽交じりにそう言う董卓殿を見て、

「董卓殿、今回のことは董卓殿のせいではないですよ。」

俺は決意する。

「それにご自分を卑下する必要もないですよ。」

この儚げな少女と

「董卓殿がどれだけ一生懸命にがんばってきたか・・・」

その少女を己が身に代えてでも、守ろうとする。

「この洛陽に住むすべての民が知ってますよ。」

心優しい親友を

「だからあなたは胸を張ってればいいんですよ。その身にかかる火の粉は俺が、俺たちがこの身に代えても、振り払って見せます。」

今度こそ

「あなたも、あなたの親友も」

この命に代えても

『守って見せますから』

第十三話 反董卓連合 その2（後書き）

次こそ次こそ連合を出せたらいいなあ

第十四話 反董卓連合 その3

袁紹が檄文を發してから十数日。

反董卓連合の名の下、諸侯が集結しつつあった。

S i d e : 劉備

「おっほっほっほほほほ」

連合の本陣に案内された私たちを出迎えたのは、袁紹さんの高笑いだった。

なんでも朱里ちゃんたちが言うには、この連合を發足した偉い人なんだって。

あの高笑いも本人が言うには高貴なる者の証なんだって。

・・・よくわからないけど。

でも都で庶民たちを苦しめてる董卓って悪い人を懲らしめる為、皆の力を合わせようって言う人なんだからやっぱり偉い人なんだと思うな。

朱里ちゃんたちは檄文の内容が正しいか判断できないっていったけど、でも困ってる人たちがいるかもしれないんだったら、私は放

つておけない。

『みんなが笑ってられる世界』を作る為にも自分達の為だけに、民を蔑ろにしてる董卓さんをこらしめてやらなくちゃ。

それにご主人さまも連合への参加を賛成してくれたし、私の考え褒めてくれたし／＼／

うん、がんばろうーみんなのために私も出来るだけのことをするんだ！

S i d e：孫策

母様の名代として連合に参加したけど・・・。

何？あの馬鹿？

あれが袁家の党首なの？

袁術ちゃんといい、袁家って馬鹿しかいないのかしら？

・・まあいいわ、この戦いで何としても孫家の名を高めて、孫家独立の足がかりにしてやる。

南陽の小猿ごときが、いつまでも虎を飼っていられるとは思わないでよね。

ああ〜早く袁術ちゃん達の首を刎ねたいわ。

その為にも、董卓には贄になってもらわないとね。

実際に暴政が行われていようが、いまいが関係ないわ。

出る杭は打たれるのが世の常。

孫呉千年の大計のためには、董卓にはきっちり死んでもらわなきゃね〜

S i d e : 曹操

「あら〜華琳さん、や〜つといらっしやたんのですの？」

本陣に着くなり聞きたくもない声に迎えられた。

・・・はあ

「・・・久しぶりね麗羽、あいからわず耳障りな声なこと」

彼女とは腐れ縁だけど、あいからわず好きになれそうもない声だわ。

「もう皆さんとつくについてますわよ、華琳さんがびりけつですわ、び・り・け・つ」

「あーはいはい、すまなかつたわね遅れて」

無視無視、麗羽の言うことをいちいち真に受けてたら、胃に穴が開いてしまうわ。

「そんなことより皆揃っているのなら、さっさと軍議を始めましょう」

「そんなこと、ぶりけつのあなたに言われるまでもなくわかっていますわ」

しつこい！！

まったく昔から麗羽は、しつこく、ねちっこく、嫌味っတာらしいのよ。

・・・こほん、まあいいわ。

「なら早く始めましょう。まずは知らない顔も多いことだし、名乗りでもあげましょうか？」

と私が無難な提案をすると

「そうですね、では私から名乗らせていただきますわ。ああ、ぶりけつの華琳さんはけっこうですわ」

と麗羽が名乗りを上げた。・・・ほんとしつこい！

「まあ皆さん存じていらっしゃるでしょうけれど、私が名門袁家の党首、袁本初ですわ」

と、麗羽の名乗りに続いて皆も名乗っていく

袁術、馬騰の娘の馬超、公孫賛、それに孫堅の娘の孫策か、なるほどさすが只者じゃないはね。虎の娘は虎ってところかしら。

今は袁術の客将に甘んじてるようだけど、いつまでも猿に虎は抑えられないでしょうね。

いずれ私の覇道に立ちふさがる大きな壁になるのかしら。楽しみね。

次は？

「義勇兵の将、劉備です。隣にいるのが軍師の諸葛亮、そして天の御遣いであり私達のご主人さまである」

「北郷一刀だ」

へえ、あれが管路とかいう似非占い師の言う『天の御遣い』ねえ。

確かに見たこともない格好をしてるけど、問題は中身ね。

見た感じ、武芸に秀でてる感じはしないけど、知識でも豊富なのかしら？

まあどの道、今の所は路傍の石にしか見えないわ。

気にすることもないでしょう。

「さて皆さん群議を進めるにあたって大切なことを一つ決めなくては いけませんわ」

諸侯の名乗りが一段落したとたん、麗羽がこう切り出した。

嫌な予感しかない。

きつと麗羽のことだから、ろくでもないことに違いないけれど・・。

「そ・れ・は・連合を取り仕切る、総大将を決めることですわ」

・・・予想より酷かった。

きつと麗羽のことだから自分がやりたいのに、余計な誇りが邪魔して自分からは言い出せないのね

まったく面倒くさい性格なこと。

S i d e : 劉備

総大将つて、袁紹さんやりたそうだし、袁紹さんがやればいいんじゃないかな？

自分から言い出すのは恥ずかしいのかな？

だったら私が言ってあげてもいいのかな？

そんなことを考えてたら、ご主人さまが立ち上がった。

「なあ、そんなにやりたいんなら袁紹がやればいいんじゃないか？」

うんうん、さすがご主人さまだね。私もそう思ったよ。

でも朱里ちゃんのほうを見たら何だか難しい顔をしてた。

「何ですよ、あなたは？この私に対して随分と無礼な口を利きますわね。ブ男の分際で失礼じゃありませんこと！それに私、やりたいだなんて一言も言ってますんわ」

ええ、そうなのかな？やりたそうにしか見えなかったけど。

「いやもういいよ、こんなことに無駄な時間かけてないで、俺達は一刻も早く苦しんでる民達を助ける為に行動すべきだろ？だから袁紹がやったらいいよ」

そうだよね、私達はそのために集まったんだから、さすがご主人さまだ／＼

でも朱里ちゃんは、なんでかご主人さまを諫めようとしている。

「随分と偉そうなことを言いますわね。自称『天の御遣い』さんやらは」

あれ？なんか袁紹さんの頬がピクピクいつてるよ・・・。

「よろしいでしょう。あなたがそこまで言うのなら私が総大将をやってもよくてよ。皆さんもそれでいいかしら？」

反対意見はないようだ。よかった、これで軍議が進められるよ。

第十四話 反董卓連合 その3（後書き）

一刀君は蜀✓になりましたね。

この話しでは劉備はまだ義勇軍の将にしました。

それにしても一刀君は無礼極まりないですねw

次回から戦闘に入れるかな？

そしてこの戦いの結末は

オリジナルな展開を予定してます。

第十五話 反董卓連合 その4（前書き）

お気に入り200件突破

読んでくださってる方、大感謝です。

第十五話 反董卓連合 その4

Side: 詠(賈馮)

「どうやら連合は？水関を攻める道を選んだようね」

他にも洛陽に至る道はあるけど、あえて難攻不落な関がある道を選んだか。

まあ、派手好きな袁紹のことだから、何も考えずに「華麗に進軍ですわ」とか言ったんでしょうけど、僕らにとってはありがたい。

「僕らは、？水関、虎牢関で敵を向かい討つ間に、万が一を考えて洛陽から長安へ撤退を開始するわ。」

長安には帝もいらつしやる。いくら袁紹が馬鹿でも、いきなり攻め込めはしないはず。

まあ、予想もつかない馬鹿だから、考えなしに攻め込むことも視野に入れて、策は考えてはあるけど。

「？水関の守りは、高順、霞、華雄に任せる」

「「「応！」「」」」

「大將は高順、お願いできる？」

「任された」

うん。霞と華雄だけなら暴走が怖いけど、高順がついていれば安心できる。

それに二人とも高順のことは信頼してるみたいだしね。

「虎牢関の守りは、大将に恋、軍師にねね、それと遷」

「・・・うん」「おまかせなのです。」「ええ、お姉さまと一緒にがよかったな」

「あんたは華雄と一緒にだと妄想に耽って使い物にならないから駄目！」

「・・・ちえ」

まったくもう・・・。

「洛陽からの撤退の指揮は、『李力ク』と『郭？』の姉妹にやらせるわ」

あの二人は派手さはないが堅実な指揮をする。今回の任務にうってつけだろう。

「後は何かあるかしら？」

僕がそう言うと考え込んでた高順が手を上げた。

Side:高順

「何かある？高順」

賈馱に質問を許された俺は

「出来たら『徐栄』と『鴉』^{からす}を貸してほしいんだが」

と頼んでみた。

鴉とは細作の精鋭部隊で徐栄はその部隊長である。

鴉は賈馱の直属部隊で、あまり表沙汰には出来ない仕事などを受け持つ。

『表』の細作とは違い、部隊長の徐栄以外は、顔も名前も賈馱しか知らない。

俺も黄巾討伐の際に徐栄とは何度か顔を合わせたが、その部下とは一度も顔を合わせなかった。

「何か考えがあるんでしょ？わかった今回、鴉は高順の指揮下に組み込んでく」

と事情も聞かず了承してくれた。

信頼に答えんな。

Side:月(董卓)

「高順さん」

軍儀が終わり皆が解散する前に、私は高順さん呼び止めた。

「はい、何でしょうか？」

こちらに歩み寄ってきた高順さんを前に、詠ちゃんを一瞥する。

「詠ちゃん、いいよね？」

詠ちゃんにそう確認すると、

「うん」と頷いてくれた。

「高順さん、遅くなってしまいましたが、私の真名をあなたに預けます。受け取っていただけますか？」

とそう聞くと、高順さんは片膝をつき頭を下げながら

「は、私のような者に董卓様の真名を預けてくださるとは光栄のいたり」

「大袈裟ですようへう。え、えと私の真名は『月』といいます。この名あなたに預けます。」

「は、確かにお預かりしました。改めて我が名は高順、真名はありませんので、今までどうりお呼びください。」

「僕の真名も預かってくれる？」

私が真名を預け終わるのを見て、詠ちゃんが話しかけた。

「僕の真名は『詠』高順、あなたを信じて頼りにしているわ。」

「確かに受け取ったよ、我が名は高順その信頼に全力で答えるよ」

S i d e : 高順

月と詠から真名を受け取った後、月が皆に向けて祈るように語った。

「皆さん、どうかどうか無事で帰ってきてください」

俺達は

「「「「「もちろん」です」」」」」(や)「「「「「

その声を背に出陣していった。

また皆で笑いあうために・・・。

第十五話 反董卓連合 その4（後書き）

やっと月と詠と真名を交換できた。

ちと強引でしたが、ここで交換しないともう機会ないですからね。

鴉・・・だって名前いいの思いつかなかったんだもん。

第十六話 反董卓連合 その5（前書き）

反董卓連合編が長くなるのは、この戦いこそ董卓陣営の見せ場であるからですと、言い訳しますw

第十六話 反董卓連合 その5

？水関に着任した高順達は、連合の動向を探りつつ対策を協議していた。

S i d e：高順

「さて細作の情報によると、後半日ほどで連合は？水関に到着するだろう」

俺は皆の顔を見回しながら確認していった。

「連合の兵数は約30万、対する我方は？水関に5万、虎牢関に7万の計12万」

「まずは6倍近い敵とここで相對する訳か・・・」

と美命が溜息交じりに呟く。

「さすがにうちらでも、まともにやったら勝ち目薄いで」

霞も渋い顔しながら弱音を吐く。

「確かに戦の置いて数は絶対だ。基本的に戦いにおける必勝法とは、まず相手より兵数を揃える事。多少の戦術や個人の武など絶対的な数の前では意味をなさないからな。」

恋みたいな例外もあるけど、さすがに賊相手とは違って鍛え上げられた軍相手に1人で25万の差を覆すのは絶対無理だしな。

「だが今回に限って見れば、数の差が絶対の戦力差とは言えないんだが、何故か解るかな霞くん？」

「え、うちかいな？」

いきなり話しを振られて慌てる霞

「うーん、大将が袁紹アホやからとか？」

「まあ間違いではないけど」

姉あねさん、もう少し考えようよ。

「では何故大将があれな人と困るのでしょうか、美命ミコトくん？」

美命はふむ、と少し考えてから

「連合の連中は別に仲のいい者同士というわけではないからな。そんな連中を纏める能力など袁紹にはないということか。つまりは数ほどの働きはしないと言うわけだな。」

「うん、まあそれで正解だな」

「か、華雄っち、昨日なんか変な物でも食ったんと違っ？」

驚愕の顔で美命を見つめる霞となんでだと突っ込む美命。

いつもと立場が逆だなっと思いながら話を進める。

「つまり連合の連中は共通の認識で参加してるわけではなく、お互いの利害関係が一致してるから一時的に協力関係にあるにすぎんというわけだ。」

敵対関係にある諸侯もいるくらいだな。

「表面上は協力関係にあっても、腹ん中じゃあお互いにいかに労少なく功多く取るか、相手を出し抜くことしか考えてないだろうさ。」

そこにきて大將が袁紹^{あれ}だからな

「こちらの内部工作しだいで簡単に瓦解しかねないって訳だ」

まあそうはこちらの思惑どうりに行くとも思えんがな。

「すでに徐栄の指揮の下、鴉に動いてもらって連合の切り崩しにかかってもらっている。うまくいけば連合内部に相互不信の種を植え付けることが出来るだろう」

まあ実際はすでに植えてある種に、水を撒くわけだが。

なるほどなあ〜と感心する二人を見てさらに話を進める。

「それに大軍には最大の弱点になり得る物がある。それは何でしょうか、霞くん？」

「え！またうちかいな」

いやだつて答えるの二人しかいないし

「うう、わからへん、うち考える苦手やもんっ」

姉さん・・・。
あね

「では美命くん？」

「大軍の弱点か・・・うむ、もしかして糧食か？」

「正解です。」

美命が答えたとたん、目を見開いて

「うんなあほな・・。うち華雄っちよりあはやったんか・・。」

と涙する霞。

つて姉さん、その言い方は美命に失礼です。
あね

「古来より飢えた軍が勝つたためしはないからな、いかに兵糧を確保するかが戦において重要な点になるわけだが、鴉からの情報によると袁紹はその点を重要視してないらしく最低限の護衛しか配備してないらしい。」

どうせ前線になるべく兵を多く配備して、自分の権勢を誇示したかつたんだろう。

「しかも諸侯の中には他軍の糧食をあてにして、さほど持ち合わせがない状態で参加してる者も多いらしい」

義勇軍である劉備など、今日の食事にも困る状態らしい。他軍からの施しがなかったらどうするつもりだったのだろう？

「と言う訳で鴉には隙を見て糧食に火を放ってもらう手筈になっている。」

徐栄、大活躍の巻だな。

「なるほど〜じゃあうちの出番は？」

先ほどまでと違いやる気の溢れる顔で聞いてくる霞。

で・も・ね

「関に籠って適当に相手を牽制しつつ、注意を引き付けて鴉から目を逸らす」

「つまりその心は？」

「時間稼ぎ」

ええ〜つまらんやん！と不満を漏らす霞

「いくら纏りのない軍とはいえ、あの大軍相手に真正面からあたって勝ち目なんかないだろ。と言う訳で間違っても相手の挑発に乗って飛び出したりしないこと、いいね二人とも？」

ぶつぶつと膨れる霞

まあ美命は大丈夫だろうし、霞もちゃんと自制してくれるとは思っ
けどね。

「もし飛び出したりしたら、霞の場合一生禁酒してもらってからその
つもりで」

そんな殺生なぐという霞の言葉を背に、もう一つの作戦を実行す
べく徐栄の元に向かった。

半日後

S i d e : 劉備

ついに？水関が眼前に姿をあらわした。

袁紹さんに無理やり先鋒を任されてしまったけど、朱里ちゃんの機
転で兵5千と糧食や武具を出してもらえた。

作戦についても、朱里ちゃんと雛里ちゃんの二人が考えてくれた。

なんでも？水関の守将の内、張遼さんと華雄さんの二人は直情傾向
にあるらしいから、挑発して関から引つ張り出し、さらに押されて
と見せかけ敵を袁紹さんに押し付けて先ほどの意趣返しをして
やろうとのことだった。ただ高順さんとか言う人のことはよく知ら
ないらしい。御主人様は聞いたことがあるようなことを言ってたけ
ど。

でもすごいな二人とも、私じゃこんな作戦思いつかないよ。

だめだな私、何の役にも立ててないよ。

・・・うつん、駄目駄目こんな風に落ち込んでちゃ駄目だって御主人様にも言われたばかりだ。

何をするにしても思いが大事なんだって、私が理想を叶えようと想い続けることがまず必要なんだって。

うつん、私は洛陽の民達を助けたい！

その為にはまずこの戦いに勝たないと。

うつん絶対に勝つんだ！！

第十六話 反董卓連合 その5（後書き）

誤字脱字などありましたらご報告お願いします。

感想お待ちしております。

第十七話 反董卓連合 その6（前書き）

難産だったわりにこの程度・・・。

第十七話 反董卓連合 その6

連合の先陣である劉備軍による？水関への攻撃が開始された。

劉備軍の軍師による作戦とは、華雄を罵倒し？水関より引きずり出し、そのまま押されてる振りをして袁紹軍に押し付けその隙をつき？水関への一番乗りを果たそうというものだった。

その作戦どおり華雄を罵倒するも、まったく反応がなく、それどころか関自体不気味なほど沈黙を守っていた。

作戦は遅々として進まず、劉備軍の中に焦りと戸惑いが走り始めていた。

S i d e : 関羽

どういうことだ？

聞いた話では華雄とは己の武に対して自信過剰でなおかつ単純な性格をしており、一旦頭に血が上ると周りの制止など聞かず猪突してくるような武将のはず。

これほどまでに罵倒されれば飛び出しても可笑しくないのに、それどころか反応すらない。

まずい、すでに作戦開始より半日もたってしまっている。

先ほどより袁紹より矢のような催促がきている。

このままではまたどんな無理難題を吹っかけられるかわからん。

早く何とかしなければ。

むう、しかしどうすればいいか・・・。

関羽は次第に自分自身の焦りと苛立ちを隠せないことに気がついていなかった。

S i d e : 美命

連合からの我らに対する罵倒が始まって、すでに半日が過ぎようとしている。

少し前までの私ならあの罵倒を聞いたとたん、理性を失い飛び出していただろう。

だが冷静になって聞いていると、我らを引きずり出そうと必死になっているのがわかり、寧ろ滑稽に聞こえてくる。

「なあなあ華雄？」

そんなことを考えてたら、霞が話しかけてきた。

「もうそろそろいいんとちゃう？うちも辛抱たまらんのやけど。」

「少しは落ち着け霞、焦りは禁物だぞ」

ふ、この私が他人を抑える役目を担うとはな。

「高順の部隊展開は？」

と霞に作戦開始の最終確認をする。

「ばっちりみたいやで、あとはこちらにあわせてくれるやろっ」

「そうか」

霞の返事を聞き私は作戦を開始する為城壁へと向かう。

「霞、兵の指揮はまかせたぞ」

「おう、ばっちりまかせい！」

霞と兵の配置が終わったのを確認して、私は城壁から敵軍を見下ろす。

さて、月様を苦しめる賊軍共を駆逐するとするか。

Side: 関羽

いくら罵倒しても効果が得られず、どうすべきか悩んでいたが、ようやく華雄らしき人物が城壁より顔を覗かせた。

「ようやく顔を見せたか臆病者め、あまりの恐怖に部屋に閉じこもり打ち震えてるかと思ったぞ」

やっと罵倒が効いてきたかと嬉々として、さらに畳み掛けようと言葉を浴びせたがなにやら様子がおかしい。

遠目ではあるが華雄の様子は怒りに打ち震えているというより、我らを蔑んでいる様に見える。

「どうした？貴様も多少は腕に覚えがあるようだが、私の前に出てくる気概もないと見える。所詮口先だけの臆病者にすぎんか。そうだろうな所詮塞にこもって打ち震えてるだけの軟弱者なのだろう。この卑怯者めが！」

すると華雄は怒り出すどころか、心底呆れたような声を出した。

「お前は阿呆か？」

「・・・何？」

私は一瞬その言葉の意味を理解出来なかった。

そんな私に構わず華雄が言葉を続ける。

「我らは籠城してるのだぞ。なんで攻めてくる敵に対して態々外に出て戦うなんて不利になるような真似をしなければならない？」

「ぐ、それは」

冷静に問われて二の句がつけない私に、華雄がさらに畳み掛ける用続ける。

「大体先ほどから大口叩いておるが、誰だ貴様？」

「我は劉玄徳が一の家臣にして、天の御遣いの一の槍、関羽雲長なり！」

高らかに名乗った私に対して華雄は

「知らん」

一言で切り捨てた。

「劉玄徳？どこの州牧だ？聞いたことない名だが」

「我等は世の腐敗を正そうと集まった義勇軍だ！！」

私は華雄の態度に、苛立ちを覚えながらそう答えた。

すると華雄は心底呆れた顔をし

「義勇軍？そんな雑兵が武がどうかよく語れたもんだな、身の程を知らぬとはこのことだな」

と侮蔑を含めた言葉を放ってきた。

「おのれ！我らを愚弄する気か！！」

「事実だろう？それに天の御遣いなど似非占い師の戯言を本気にするとは・・・ふう」

華雄がやれやれと首を振る。

もはや私の忍耐も我慢の限界だった。

「おのれ！！我らのことだけに飽き足らず御主人様まで愚弄するのは！！」

「御主人様だと？ふっ その御遣いとやらは女を囲う為に天から遣わされたらしいな、何人の女を毒牙にかけたやら・・・」

やれやれと蔑んだ目で見下ろしてきた。

「もはや我慢の限界だ、出て来い華雄！その首、我が刎ねてくれん！！」

もはややつが息をしてること自体許せん行為だ。そのそつ首叩き落さねば気がすまん。

「だから我等は籠城してると言ってるだろう？一度で理解できないとは、しよせん義勇軍などはその程度か、主の器量がしれるな」

華雄はそのまま踵を返し

「我は貴様に用はない。貴様が我に用があるなら貴様自身が尋ねてきたらどうだ？まあ出来っこないが」

そういい残しもはや興味がないと奥に帰ってしまった。

「ふざけるな！その首落として二度と大口叩けんようにしてくれる。
全員突撃するぞ！！」

S i d e : 霞

華雄に散々罵倒された連合のやつらは、当初の目的忘れおって突っ込んでくるで

まあ、猪やと思っていた相手に、ああも見事に言い負かされたら我慢できんのもわからんでもないけど

挑発してた相手に自分が挑発されてどないすんねん。

「霞、後は頼んだぞ」

おっと、ぼうつとしとる場合やないな、華雄っちがあない見事に仕事したんや、次はうちの番やな。

「みんな配置についとるな？ほな充分引き付けてから弓を一齐射すんで」

先頭きつて突っ走ってくんのは、さっき華雄っちに言い負かされてた姉ちゃんやな

力ずくで落ちるやつたら、？水関は難攻不落なんて呼ばれてへんであないに簡単に我を忘れるとは昔の華雄っちなみに猪姉ちゃんやな

「まだや、もう少し引き付けや」

充分敵さんを引き付けてから、うちは命令を下す

「いまや、弓隊一斉射や！！」

充分射程に入った敵に対し、3万人による弓の一斉射を開始した。

S i d e：関羽

「しまった！」

挑発に乗せられたと気がついた時には遅かった。

塞から豪雨のように矢が放たれ、突出しすぎた我らに降り注いだ。

「ちっ全員すぐに引け！後退だ！！」

なすすべもなく矢に貫かれていく仲間を横目に、なんとか無事な味方と後方へ下がろうとする、が

塞からは容赦なく第2、第3射と矢が放たれてくる。

「急げ、なんとしても射程から逃げ延びろ！！」

すでに前衛の8割を失ってしまったが、なんとか全滅を避けるべく
後方へと逃げ延びる。

しかしなんとか本陣へと逃げ延びた我らが見たのは、赤々と燃える
各陣と混乱する人々の姿だった。

我らにとっての悪夢はまだ始まったばかりだった。

第十七話 反董卓連合 その6（後書き）

恋姫の関羽って華雄なみに猪だと思っただけど

人の話聞かないし、すぐ刀を向けるしね

誤字脱字報告、感想お願いします。

第十八話 反董卓連合 その7（前書き）

早めに纏ったので投稿です。

あんまり早く投稿してボロが出ないといいけど・・・。

第十八話 反董卓連合 その7

時は少し戻って

連合、？水関攻撃開始より二刻後（約一時間後）

S i d e：徐栄

^{との}高順殿の命の元、連合の陣に鴉を潜入させて2日。

拙者も敵陣へと潜入して、情報収集を終えた面々から報告を受けていた。

「すると曹操と孫策の陣以外は、備えが薄く糧食に対して仕掛けても問題はないと？」

「は、この二つの陣だけは警戒が濃く、無理に近づけないこともありませんが、発覚する恐れがあるかと」

「やむを得ないでござるな」

報告を聞きすぐさまこの二つは計画から除外することを選ぶ。

「この二陣も含めることに拘ると、計画そのものが失敗する恐れが出てくるでござる。曹操、孫策に関しては警戒のみ、あまり近づいて警戒されない様にするでござるよ」

命を下すと部下が数名姿を消す。すぐに行動に移ったようだ。

「他の者は当初の計画どおり、各班に分かれて各陣の要所の見張り

を始末、その者と入れ替わり合図と共に火を点け混乱させるでござる」

「「「はっ」「」」」

「では散」

スッ

命令と共にすべての部下の気配が消えた。

さて拙者も参るとするでござるか。

こたびの命、なんとしても成功させ 高順殿からお褒めの言葉を頂かねば。

なにやら最近、^猪華雄殿が 高順殿^{との}に対し気安う^とござるが、高順殿を見初めたのは拙者でござる。

ここいらで 高順殿^{との}が誰の者かはつきりさせとかなければ、ふふふでござる。

現在に戻って

Side：関羽

「これはいい・・・」

本陣へと逃げ延びた私が見たものは、各所から上がる火の手と混乱し逃げ惑う兵士たちだった。

「姉者――」

「鈴々！」

聞き覚えのある声のほうに目を向けると、妹分の鈴々（張飛）が駆けてきた。

「鈴々これはいったいどうしたというのだ？何があった？御主人様と桃香様は無事なのか――！」

「お、落ち着くのだ愛紗」

狼狽し詰め寄る私を鈴々が制止する。

「あ、ああ、すまなかったな鈴々、で状況は？」

少し落ち着き鈴々に改めて聞く

「それがよくわかっていないのだ、愛紗が突撃を開始したのを見たお兄ちゃんが、鈴々に連れ戻すように頼むから鈴々が愛紗の所に向かおうとしたら、いきなり周りから火の手が上がったのだ。」

なんとすでに敵がこちらの陣地に入り込んでいたのか。

「だから、お兄ちゃん達を安全な後方に連れて行ってから、愛紗を探しに来たのだ」

そうか、御主人様は無事か、とりあえず安心した

「そうかよくやったぞ鈴々」

とにかくご主人様に合流すべく、鈴々に案内させて御主人様の元に向かおう。

S i d e : 曹操

「すると桂花（荀？）、我陣に対しては火は放たれていないのね」

現在の状況を報告しにきた桂花に確認を取る

「は、どうやら我陣と孫策の陣のみ無事のようにです」

なるほど警戒の厳重な二つの陣はあえて放置したか・・・するとこの策自体は陽動で次があると見るべきね。

「春蘭（夏侯惇）、秋蘭（夏侯淵）兵を纏めて戦闘態勢を取りなさい。おそらく次があるわよ。」

「「は」「

「紫炎（曹仁）と空（曹洪）は糧食の部隊を守って後退なさい」

「「了解です（です）」「

「季衣（許緒）は私の護衛として傍にいなさい」

「はい！」

さてこの策の実行者は誰なのかしらね？才ある者なら是非配下にくわえたい所ね。

S i d e：孫策

「冥琳（周瑜）兵を纏めしだい後方へ引くわよ」

私は天幕に入るなり、戦況報告を纏めていた冥琳に命を下す。

「どうしたの雪蓮（孫策）いきなり？」

確かに私達の陣は被害を受けてない。この状況でいきなり後退は普通ありえないだろう、だが

「いやな予感がするの、ここは一度下がったほうがいいわ」

「雪蓮の勘か？」

冥琳に頷きながら考えを話す。

「私達の目的が孫呉の独立にある以上、ここで兵を損ねる危険を冒すべきじゃないわ」

他陣営の混乱に巻き込まれるのはよろしくない

「幸い曹操が迎撃の準備をしてるようだし、私達は下がらせてもらいましょう」

ついでに袁術ちゃんの所に打撃を与えてくれれば、万々歳だしね」

「わかった雪蓮の勘がそう言うならそうしたほうがいいのだろう、明命！（周泰）」

そう言うとき冥琳は明命を呼びつけた。

「お呼びですか冥琳様」

「うむ、我等は後退する。この後おそらく敵が来るだろうから、お前は敵将をよく観察しておけ。戦闘行為はしなくていい。情報収集のみに専念せよ」

「了解しました」

スッ

そう冥琳に答えると明命はスッと姿を消した。

いつも思っただけど、どうやって消えてんだらう？

「さてならば早急に我等は後退するぞ」

くだらない疑問を考え込んでいた私に、冥琳は急かすように言ってきた。

Side：高順

「予定どおり各所に火の手が上がりました」

？水関の外に伏兵した俺は、部下からの報告を受けていた。

「徐栄達はうまくやったようだな」

と呟いたあと報告を続けさせる。

「ただ予想どおり、曹軍と孫軍は警戒が激しく近づくのは危険と判断された模様、その後曹軍は戦闘態勢を孫軍は後退を始めた模様です。」

さすがに英雄とつたわれる人物は違うね。対応の速いこと。

「予想の範囲内だな、狙うは袁紹の本陣、混乱が収まる前に一当てして？水関に向かうぞ。帰還時を見誤るなよ」

「「「「「心」」」」」」

では作戦の第一段階の仕上げといきますか

「全員騎乗！」

さて『陥陣営』とまで呼ばれた我が力、見せてやりますかね

第十八話 反董卓連合 その7（後書き）

ちよつと反董卓連合編の終わりが見えてこない・・・。

結末は一応考えてあるけど、選ぶならどれがいいですか？

？高順の大活躍で連合ぼこって董卓軍大勝利

？原作どおり、最終的には敗北、月、詠、一刀のメイドに

？勝利目前で裏切り者が出て敗北、高順が月、詠救出後董卓軍と合流、その後放浪へ

？白装束たちが現れ、月を暗殺、詠脱出後高順と合流、復讐を誓う

？その他

後、オリキャラについては反董卓連合編が終わり次第設定を載せようかと思っています。

第十九話 反董卓連合 その8（前書き）

アンケートに答えていただきありがとうございます。

今の所1番が人気で、2番がいらん！って感じですかね

やっぱり種馬くんのハーレム✓は人気ないですね

第十九話 反董卓連合 その8

連合は混乱の最中であつた。

先陣たる劉備軍の一方的な敗走

さらにその隙をつかれ、連合の各要所から火の手がいきなり上がり一氣に燃え広がったのである。

曹操、孫策、などはすぐさま対応したが後は散々たるものだった。

特に連合の総大将である袁紹は、各諸侯に対して適切な指示を出すどころか、自軍の混乱すら收拾出来ずにいた。

顔良、文醜などが指示を仰ぐとするも袁紹自身は狼狽し、まともに判断を下せる状態ではなかったのである。

そこへさらなる打撃を与える為、高順率いる騎馬隊1万5千が袁紹軍に向かって突撃を開始したのである。

袁紹軍は連合の中でも最大の兵力を誇り、実に連合の三割近い8万を率いて参加している。

だが兵たちは混乱し、隊列すらまともに組んでいない状態である。

まともに反撃など出来ようはずもない。

そこへきて攻めてくるは『陷陣營』こと高順率いる董卓軍最精鋭部隊

もはや数の差など問題にもならなかった。

彼らは一系乱れぬ統率で突撃すると、縦横無尽に暴れまくり袁紹軍中枢をズタズタに引き裂いた。

袁紹軍の兵士は蜘蛛の子を散らすように逃げ惑い、袁紹軍は崩壊寸前の有様であつた。

S i d e：曹操

「不味いわね、ここで形だけの総大将とはいえ麗羽の軍が崩壊すると、連合そのものが瓦解しかねない。どう思う桂花？」

「は、ここは我軍から援軍を送るしかないかと」

やはり桂花もそう思うか。孫策、公孫賛、馬騰などの軍はすでに下がっているし、あの劉備などはすでに兵力として成り立たない。他の諸侯も自軍の立て直して精一杯のようだ。

是非もないわね

「春蘭！秋蘭！」

「はっ」「」

「あなた達は兵1万を率いて袁紹軍の援護に向かいなさい」

「了解しました。」

「ただし無理に戦わなくていい、敵もこちらが牽制すれば引くであろう。その際に深追いすることは避けよ」

「戦わずに追い返すのですか？」

春蘭が不満そうにたずねてくる。

まあこの娘この性格では、敵をただ追い返すだけでは納得できないでしょうね。

「今の状況では他の諸侯など、あてには出来ない。我軍だけがここで消耗するわけにはいかないの」

「・・・はあ」

・・・わかってない顔ね・・・。

「秋蘭、春蘭が暴走しないよう、手綱は引き締めてね。」

「承知しました」

「か、華琳さま」

ふふ、困った顔のあなたも可愛いわね、春蘭

それにしてもあの高順とかいう男

あの騎馬隊を率いる統率力といい、個人の武といい中々の物ね。

それにこの策自体あの男の案だとしたら、たいしたものだね。

「欲しいわね、あの男」

「か、華琳さま!!」

ふふ、桂花ったら、男と聞いて慌てているわね。

でもあの才、なんとしても手に入れるわよ。

S i d e : 高順

袁紹軍にはそれなりの被害を与えたし、そろそろ引き際かと考えてたら1人の武將が槍を突き出してきた。

「その武將、貴様がこの軍の大將か？名を名乗られよ！我が名は淳于瓊」

・ ・ 男の武將だ ・ ・

この世界の有名武將はすべて女性というわけじゃないのか？

おっと下らん思考を張り巡らしている場合じゃない

「我が名は高順、天下の飛將軍呂奉先が一の槍なり!!」

「ならば高順とやら我が槍の鎧となれ!!」

そう叫ぶと淳于瓊が槍で突いて来た。

だが、その速度は霞の比ではない

「遅い」

ビュン、ドス！

「が！？」

相手の槍を交わしすれ違いざまに、逆に左胸を突く

淳于瓊はもろに槍を喰らい、仰け反るように馬からずり落ちた。

「ひい、淳于瓊様がやられたー」

「い、一合も持たないなって、ば、化け物だー！！」

化け物って失礼な、そういうのは恋の武を見てから言ってくれ。

もつとも恋は、癒しの女神だな！

そんなことを考えてたら、夏侯の旗がこちらに向かってくるのが見えた。

どうやら曹操が援軍を送ってきたか。

「ここが引き際だな。全員？水関に帰還するぞ」

作戦の第一段階は終了だな。

だがまだ全体の兵力は敵が上回ってる。

もつとも作戦の第二段階はもう発動してるかな。

さあ、戦いはこれからだ！！

第十九話 反董卓連合 その8（後書き）

お気に入り350件突破しました。

ご登録いただいた皆さんありがとうございます。

これを記念して反董卓連合編終了後

番外編を書きたいと思います。

つきましてはどんな話がいいかアンケートを取りたいと思います。

よろしければご協力下さい。

？徐栄と高順の出会いの話

？月と詠の日常

？高順の過去話

？澪と美命の話

？その他（具体的にどんな話か）

締め切りは 反董卓連合編終了までとします（いつ終わるんだろう・
・）

ではお願いします。

第二十話 反董卓連合 その9（前書き）

今までで一番難産でした。

書いては消し、消しては書き・・

今月中に反董卓連合編終わらせたいけど、どうなるやら・・。

時系列的に登場する時期、死亡時期などおかしい武将などがいます
が、

そこは『恋姫』だからで納得していただけると
作者的に助かりますw

（はわわやあわわなども仕官時期などめちゃくちゃだし）

第二十話 反董卓連合 その9

？水関での初戦は連合側の一方的な敗北で終わった。

連合が受けた損害は、先陣である劉備、袁紹混合軍7千の内8割が失われ、袁紹軍本隊も実に1万人の死者と3万人の重軽傷者、さらに大将の1人である淳于瓊が高順に討ち取られたのである。

他の諸侯も人員の損害こそ無かったものの、曹操、孫策以外の諸侯が糧食のほとんどを焼失したのである。

連合は体制を立て直す為、？水関から20里ほど後方へと退いた。

S i d e : 高順

？水関に帰還した俺は美命、霞と軍儀を開き今後の対策を練っていた。

「いやー高ちゃんたらずるいわ。1人だけ思う存分暴れおって」

霞は自分が騎馬隊を率いたかったらしい。

気持ちは判らんでもないが、霞に騎馬隊を任せると調子に乗って曹操軍にも突っ込みかねないからなあ

戦闘狂だから。。。

「それは置いといて、連合は20里ほど後退し戦力の立て直しを図るらしい」

霞がぶうぶうと膨れているが無視して話を進める。

「ふむ、ならばここで追撃してはいかんのか？体制を立て直されると数が少ないだけこちらが不利にならないか？」

美命の言うことにも一理ある、だが

「確かにそのとうりなのだが、初戦で勝利したとはいえ袁紹、劉備以外には人員的な損害は与えていない。しかも曹操、孫策は無傷だ。初戦と違い警戒してるだろうし奇襲も難しいだろう。」

いくら士気が落ちたとはいえ、まだ正面決戦して勝てるほど戦力差が縮まっではない。

「ならばどうする？このまま手を拱いていては勝てるものも勝てまい？」

もちろんだと美命に頷いてから、膨れてる霞の頭を軽くなでた後

「そろそろ連合に打ち込んだ楔が利いてくる頃じゃないかな」

「そうでござるな、特に袁紹殿は単純でござるからな。こたびの敗戦でイラついてる所だろうし簡単に引つかかると思うでござるよ」

と俺の言葉に答えた方に声を向けると、いつの間にか徐栄が立っていた。

本当、いつからいたんだ？

「鏡華（徐栄の真名）いつからそこにいたんや？」

と霞が驚愕してるが、俺だってビックリだよ。

「些細なことは気にすんなでござる。それよりも殿、久しぶりでござるな。」

と全然些細じゃないことを棚上げして、こちらに話しかけてきた。

「ああ、でも久しぶりというほどでもないだろ？作戦開始前に顔を合わせているじゃないか」

すると鏡華（真名はすでに預かっている）は、顔を赤らめ両手を組みながら体をくねらせて

「えゝだって拙者、殿に会えるのを一日千秋の想いで待ってるんだもん、でござる」

と体を摺り寄せてきた。

あいかわらずだな、と苦笑してると

「おい、いい加減その気持ち悪い話し方はやめろ」

と美命が鏡華と俺の間に身を滑らせてきた。

「おやいたのでござるか、華雄殿」

とそれまでご機嫌だった鏡華が、美命に不機嫌な声で嫌味ったらし

く言つと

「最初からいるわ、この腹黒性悪女が」

と美命が噛み付く

何？この二人、なんで会ったとたん険悪な雰囲気になってんの？

「あいからわず愛されとるな」高ちゃんは

とか霞が言ってるけど、意味がわからん

「・・・鈍感もあいからわずやな」

「？」

霞が小声で何かを呟いたが聞き取れなかった。

「まあそれは置いといて、連合に仕掛けた策とやらを聞かせてもらいたいんやけど？」

睨みあっている2人のことは放置して、霞がそう聞いてきた。

「まあそんなに大した策じゃないさ、普通なら通用しないだろうけど相手がおほか袁紹だから多分いけると思う」

そう言つて作戦を説明しだした。

連合陣地

S i d e : 曹操

連合は？水関より撤退し軍の再編を行なっているが、士気が下がる一方だわ

原因は先ほどの敗戦で特に糧食を失ったこと

我が軍と孫策の二陣営以外、糧食に対する警戒がほぼ皆無だった為

先ほどの奇襲でほぼ焼失してしまった。

古来より飢えた軍が勝った例は無い

残った糧食ではとても全軍を賄うのは無理だ

早急に手をつたなければ・・。

先ほどの無様な敗戦の責を押し付けあっている、麗羽と御遣いとやらを見ながら溜息混じりに考えてた。

S i d e : 袁紹

「姫〜大変だ〜姫〜!!」

天の御遣いさんとやらいう礼儀もわきまえないチツチキチ〜なブ男

さんと口論してましたら、文醜さんがなにやら慌てて飛び込んできましたわ。

「猪々子（文醜）さん、何を慌てていますの？ みつとも無いですよ」

「そんなことはどうでもいいから、この手紙読んでみてくれよ」

と一枚の皺くちな紙を差し出してきた。

「ええつと何々……これがどうかしましたの？」

猪々子さんが慌てる意味がわかりませんわ。

確かに貴重な紙に書くような物ではありませんけれど？

「ええつとですね、あゝとアタイ説明とか苦手なんだよなあ、斗詩（顔良）に説明してもらっから、ちよつと来てくださいよ」

と、私の腕をつかんで走り始めました。

「ちよつちよつと、猪々子さんそんなに引つ張らないで下さい。痛いですわ！」

「いいからほら姫急いで」

まったく何々ですの……。

第二十話 反董卓連合 その9（後書き）

お気に入り400件突破しました。

ご登録していただいた皆様ありがとうございます。

引き続きアンケートも募集しますので宜しくお願いします。

（反董卓連合の結末、番外編希望話の両方募集します）
誤字脱字報告、感想もお待ちしております。

第二十一話 反董卓連合 その10（前書き）

無理やりな展開な気が・・・。

第二十一話 反董卓連合 その10

連合が？水関にて戦闘を開始する数日前から、連合内で以下のような噂が流れていた。

『連合内部の裏切り者が敵軍と密かに通じ、単独講和に踏み切り陛下を退位させ董卓を皇帝にし、その下で相国として実権をにぎる算段である』と。

当時は連合側の圧勝だと思われていた事と、何ら証拠の無い噂話にすぎぬことから

『馬鹿馬鹿しい』

と無視されていたのだが連合が初戦で大敗し、しかも糧食の殆どを失うという失態を犯したことにより一部の諸侯からは『まさか？』という疑念が出始めていた。

総大将の袁紹も自身の軍のみが大打撃を受けたことと、曹操、孫策の二陣だけ火計に巻き込まれなかったことなどから『もしかして噂は本当で、これは容易ならざる事では？』と疑いの目を向け二陣営をそれとなく監視するようにしむけていたのである。

S i d e : 袁紹

「それで斗詩さん、この紙がどうしましたの？」

と、私は猪々子を持ってきた紙を、斗詩さんに見せて問いただしました。

その紙には汚らしい文字で『普通の挨拶文』が書かれてました。

「いえ姫、これは曹操さんの陣を見張っていた細作が持ってきたものなのですが、どうやら董卓から来た密書のようなんですよ」

「な〜んですって〜?!」

あのクルクル小娘が、よもや本当に敵とお通じになってたって言うのかしら

そうなら絶対に許しませんわ!

「でもさ斗詩」

怒り心頭であの小娘をどうしてやろうかと考えてたら、珍しく猪々子さんが疑問を投げかけましたわ。

「この紙に書いてあることって、どう読んでも挨拶程度のことしか書かれて無いじゃん。」

そういえばそうですね?

「これって意味あのかね?」

め・ず・ら・し・く・猪々子さんの疑問はもっともですね。

「斗詩さんこれはどういうことなの?」

「えつとですね姫、この紙確かに一見意味ないように見えますが、よく見るとわざと字をぼやかしたり、文字を塗りつぶしてますよね？」

「ええ、確かにそうですね、まったく教養のない者が書いたんでしょうね、これだから知性のない者は・・・」

書き間違えたんなら書き直せばいいのに、大方、紙を惜しんだんでしょうね。まったく下々の者は

「いえ、そうではなくて私たちに見られたら困る部分を誤魔化す為にわざとそうしたんじゃないかなーって」

なるほど、そう考えれば納得ですわね。

「そ、それくらい私にはわかっていましたわ」

すると猪々子さんが怪むような目つきで

「本当ですか」

などといってきましたわ。

「本当にきまってます。な、なんですかその目は・・・。」

「別に、なんでもないっす」

ム力つきますわね、後でおしおきですわね。

「それで斗詩さん結局はどうなんですか？」

「えっとですね、多分なんですけど、前回曹操さんと孫策さんの陣がまったく被害を受けなかったのも、曹操さんが援軍を送ったとたん一戦もせず敵が引いたのも、敵と内通してた可能性を示唆してるんじゃないかな〜っと」

やっぱりそうなんですの、あのクルクル小娘、私を騙そうなんて10年、いや100年と3日早いんですね。どう報いにくれてやるうかしら？

なにやら斗詩さんが「あくまで可能性ですよ？」とか「敵の罠かも」とか言ってますけど、そんな細かいことはどうでもいいですね！

曹操に対する報復で頭が一杯な袁紹は、紙を手に入れた細作とやらがいつの間にか自陣から姿を消したことに気づかないでいた。

同日、長安

Side:????

帝がおわす城の一室にて、数人の者が密談をおこなっていた。

「どうやら連合との戦は董卓軍の優勢のようじゃ」

「うむ、高順とかいったか、あやつの策らしいの」

「董卓の犬にしては少しは知恵があるらしいの、あの賈馱とか申す者以外は馬鹿しかいないと思っておったがの」

「しかしこのままでは我らが計画も水の泡、なんとかせねば・・・」

「うむ、わしら宮廷に古くから仕える旧臣を無視し、好き勝手に政を行なう董卓を廃し、我らに権威を取り戻させる為あの袁紹とやらを抱き込んだのじゃが、やつがあそこまで使えんとは・・・。」

と、顔をしかめ愚痴をこぼすだけの者の中から1人の老人が進み出た。

「なに、やつが使えんのなら他の者を使えばいいだけの事・・・。」

ニヤリと笑いながら言うその老人の言葉に皆が顔を向けた。

「ほほう、すると王允殿にはその人物に心当たりございますかな？」

「うむ、少々扱いずらいかもしれんが、仕えん馬鹿袁紹よりよかるうて」

それに、と老人は言葉を続ける。

「『李カク』と『郭？』とやらもすでに抱き込んだわ、いつでも董卓を捕らえられるわい。」

くくくつ　と不気味な声で笑う老人、董卓の身に危機が迫ろうとし

て
い
た。

第二十一話 反董卓連合 その10（後書き）

誤字脱字報告・感想・アンケートなど

お待ちしております。

第二十二話 反董卓連合 その11（前書き）

1週間ぶりの投稿になってしまいました。

最近忙しくて書く暇が・・。

第二十二話 反董卓連合 その11

曹操、孫策が敵と内通してる可能性あり！

連合内にてそのような噂が流れ諸侯の間に疑心暗鬼が生じてた頃、董卓軍も思いもかけぬ事態が生じていた。

S i d e : 高順

「なんやて、撤退せよやて？」

都からの使者が持ってきた命令を読み上げたたん、霞が大声を上げた。

その命令とは『董卓軍は連合との戦闘を中止しただちに長安まで撤退せよ』とのものだった。

霞でなくても大声を上げなくなる、どう考えてもおかしな命令だ。

「うちらは勝っているんやで？連合の喉元に手かけて締め上げとる最中やのに、なんで撤退せなあかんねん！」

使者に詰め寄る霞を制し、俺は疑問を投げかけた。

「ご使者は帝の勅使と申されたな？」

使者は横柄に頷きながら

「さよう、我等は勅使なるぞ。我らの命に反するは帝に対する叛逆と心得よ」

と質問した俺ではなく霞に向かって言った。

しかし、俺は

「それはおかしな話だな」

とさらに問いかけた。

「なにがでおじゃるかな？」

と使者はイラついたように反応を返してきた。

「我らは董卓殿の臣下ですよ。いくら皇帝陛下とはいえ諸侯の臣下に対して直接勅命を下するのは少し変ではありませんかな」

「う、それは・・・」

「ましてや董卓殿は長安に向かったはず、ならば董卓殿に勅命を下し董卓殿から我らに命を下すようにすればいいのでは？」

主を介さず直接陛下から命を受けるようになっては、主従の關係に示しがつかなくなる。

「ご使者、董卓殿はいかがなされた？」

と、威圧をこめ問うと

「……」

口ごもり、忙しく左右を見渡し始めた。

これは董卓殿の身になにかあったな。

そうすると急がねばならないな。

「鏡華」

「はっ」

「ご使者を丁重に持て成してくれ、時間がない手段は選ばんでいい」

「了解でござる」

と鏡華は喚きたてる使者達を引きずって出て行った。

「なあどついうことなのだ？月様に何かあったのでは」

と美命が顔色を変えて問いただしてきた。

美命にとって月は特別な人だ、焦るのも無理ないが

「落ち着けと言うのも難しいだろうが、まずは冷静になって聞いてくれ、これはあくまで俺の予想だ」

限りなく当たってそうな、当たらないで欲しい予想だが、

「まず、月と詠だが長安にて監禁されてる可能性が高い」

殺すとしたら、連合の手で処刑したいだろうからいきなり殺すとは考えにくい。武官ならまだ知れずあの二人なら抵抗もろくに出来ず、つかまった可能性が高いだろうし。

「なんやて、それはほんまかい！」

いきり立つ霞を諫めながら、あくまで予想だと続きを話す。

「勅使が直接前線で戦ってる将の元にくるなど、よっぽどのことじゃないと考えづらい。ましてや帝の傍に月がいるのだから、そちらから命令を出させたほうが早いし、第一あの幼い皇帝が自分の考えでこんなことをするとは考えにくい」

「ということは帝の名を利用して、この命をだしたやつがいる可能性が高いな。」

と言う美命に賛成だと頷き

「いずれにしろ、鏡華が戻ってくればはつきりするだろう。」

出来たら俺の杞憂であって欲しいが・・・。

四半刻後（30分後）鏡華が戻ってきた。

「随分と早かったな」

そう問いかけた美命に、爽やかな笑顔を向けながら

「いやあ、ほんのちよつと気持ち良くしてあげたらペラペラ喋ったでござるよ」と答えた。

その笑顔が怖ええよ・・・。

見ろ、二人ともドン引きしてるだろうが

「まあいい、ご苦労だったな、早速報告してもらっていいか？」

「了解でござる。まず殿の予想どおり、月殿、詠殿は監禁されてるでござる。」

やはりそうか、嫌な予感ほど昔から当たりやがる。

「それで月様の身に危害などは加えられてはないのか！」

興奮して詰め寄る美命を手で制して、鏡華は

「とりあえず監禁はされてるようでござるが、暴行などは受けてないようでござるよ」

と安心めされいと頷いた。

すると次に霞が

「なあ、『李力ク』と『郭？』はどないしてん？あの二人がいて月と詠を守れなかったんかい」

と疑問を投げかけた。

そういえばそうだ、あの二人はそれほど無能ではないと聞いている。その二人がいながら守れなかったほどの手勢が長安にいるとは考えにくいのだが。

「あやつらなら金と地位ほしさに簡単に寝返ったそうでござるよ」

と鏡華は吐き捨てるように言った。

「なんだと！あやつらめ前々から信用ならぬ所があると思っていたが、まさか主である月様を金と地位で売るとは・・・絶対に許しては置けぬ、私のこの手で八つ裂きにしてくれるわ！！」

と、わなわなと震えながら美命が怒りをぶちまけた。

月のこととだけあって美命は冷静さを失いかけているが、気持ちには痛いほど判る。それでも今すぐ飛び出そうとしないだけ自分を抑えているのだろう。

「それで黒幕はわかったのか？」

俺は肝心なことを鏡華に聞いた。

「うむ中々白状しなかったでござるが、一人達磨になってももらったら素直になったでござる。」

・今は緊急事態だし手段を選ぶなといったのは俺だ、方法の是非は問うまい。

「・・・で？」

「従事中郎の王允殿でござるよ」

「あの狸じじいか！」

美命の声を聞きながら、俺はこれからどうすべきか考えていた。

第二十二話 反董卓連合 その11（後書き）

誤字脱字報告・感想・アンケートなどお待ちしております。

感想を下されると作者のやる気がUPしますw

第二十三話 長安脱出編 プロローグ（前書き）

今回は詠視点のみです。

第二十三話 長安脱出編 プロローグ 詠

Side: 詠

さて。これからどうするか。

人通りのない街の物陰に佇んで、僕は迷っていた。

なんとか城からは逃げてきたけど、まさかあの二人がここで裏切るとは

自分の見通しの悪さがいやになる。

連合の巨大さに目がくらみ、獅子身中の虫が見えていなかったなんて……。

こんなんじゃ、軍師失格だ。

・いけない、僕は頭を振って思考を切り替える。

後悔は後でも出来る、今はこの状況をなんとかしなくちゃ

僕は不安そうに僕を見つめる親友の手を握り締めながら

この親友だけはかならず逃がして見せると決意を新たにした。

たとえば僕の命に代えても……。

今僕らについてきてくれてる部下は、10人の鴉だけだ。長安の守備についてる兵はすべて、李カクと郭？の直属の兵だ。今の状況じゃあ信用出来ない。

宮廷を守る近衛は？

駄目だ、従事中郎の王允が後ろにいる以上陛下の名を使って押さえ込むに違いない。

やはり自力で長安を脱し皆と合流を図るしかない。

少なくとも洛陽まで逃げる事が出来れば、数千の守備兵がいる。

そう考えたとき、殺気が突然現れた。

「ミツケタワ」

二つのくぐもった声が重なり合った言葉のほうに目を向けると、全身を黒い布で覆った2つのそれがいた。

頭先从足元まで全身に黒い布のような物を巻きつただけの姿。

目にあたる部分だけはかろうじて隙間があり、そこから外を見ているのであるのか。

口元にも布が巻きつけてあり、そのため声がくぐもって聞こえるの

だろう。

僕はその姿を目にした瞬間、その名を呟いていた。

「李カク、郭？・・・。」と

「ダメジャナイ、カッテナコトヲシチャア、アナナタチハ、ワタシタチノオニギョウサンナンドカラ、セツカクカワイガツテアゲヨウトオモツテタノニ、オイタガスギルト、コワシチャウワヨ・・・。」

その言葉が発せられたのと同時に、護衛の鴉が動いた。

この10人は鴉の中でも特に腕の立つ者達だ。

僕は彼らが負ける姿など想像できなかった。

だが、

一瞬の静寂の後、10人の体は細切れにされていた。

「シツケノワルイ イヌはキライヨ」

姉妹の手にはいつの間にか2本の銅鞭が握られていた。彼女らの武器である『双鞭』だ。僕の全身が恐怖に震えた。

「コワガラナクテイイノヨ アナタチハマダコロサナイワ タダシツケヲスルダケヨ ダイジョウブ イタイノハサイシヨダケヨ タップリト カワイガツテアゲルカラ フフフフ・・・。」

瞬間、僕は二人に突っ込んでいきながら月に向かって叫んだ。

「月 逃げて!!」

「駄目!詠ちゃん」

そんな僕らを歪んだ顔で見ながら

「「ホント カワイラシイ コネ」」

ドカ!

彼女らの右手が動いたかと思ったら、僕は武器ではなく素手で殴り飛ばされた。

「くはっ」

全身を強打された僕は息が詰まり、激しい痛みが体中を駆け抜けた。

「詠ちゃん!」

「来ちゃ駄目!」

心配そうに駆け寄る月を制しながら僕は立ち上がろうとする。

文官にすぎない僕は、今の一撃で意識を保てなくなりそうになる。

けど

「くう！」

それでも僕は立ち上がる

大好きな親友を守る為に

大好きな皆の帰ってくる場所を守る為に

だけど

「「ホント アイラシクテ グチャグチャニ コワシタクナルワ」」

グシャ！

巨大な暴力が僕のそんな願いも踏みしめる。

「詠ちゃん！」

ああ、月が泣いている

泣かないで、月は僕が守るから

どんな理不尽な暴力ことからも守るから

また大好きな皆と笑い合えるようになるから

月は僕が絶対守ってみせる、だから、だから、

僕の意識はそこで途絶えた・・・。

だから、僕は君が守ってよ

高順・・・。

第二十三話 長安脱出編 プロローグ（後書き）

今回は詠の視点でのお話でしたがうまく詠の気持ちを表現できたでしょうか？

李力クと郭？が色物キャラになってしまいましたが、今回の話で急遽こんなことに……。最初は目立たない普通の武将だったのに……。

この後、幕間とオリキャラの設定載せたら本編に入ります。

幕間は、高順と誰かさんの出会いのお話です。

もしかしたら幕間数本書くかも知れませんが、予定は未定ですw

誤字脱字報告、感想、要望など募集しております。

感想もらえると作者のHPが回復します。

ではまた次回

オリキャラ設定公開（前書き）

1度オリキャラの設定を載せようと思ひまして、興味のある方はどうぞ

オリキャラ設定公開

名：徐晃 字：公明 真名：ミオ 濤

容姿：腰まで届く美しい黒髪を持ち主で、切れ長の目の知的に見える美人。

身長：やや長身（170cmくらい） 体重：普通（50?前後）

性格：普段は理的で冷静な思考の持ち主。部下に公平で自らは功に驕らない。だが言わずと知れた華雄大好き娘で、華雄が絡むと人が変わったように興奮状態になる。

武器：大鉞

名：徐栄 字：不明 真名：キョウカ 鏡華

容姿：薄紫で肩位まで伸ばした髪の両脇を白い布で止めた髪型をしている。少し幼い感じのする顔をしている。

身長：少々小柄（150cmくらい） 体重：軽そう（乙女の秘密）

性格：普段から飄々としていて掴みづらい性格。ある出来事が切っ掛けで高順のことを慕うようになり、殿と呼び懐いている。本人は本気で添い遂げるつもりで、虎視眈々とライバルを蹴落とそうとしている。

武器：服の中にあらゆる武器を隠し持っている。暗器使い

名：李カク 字：不明 真名：マヤ 真夜

容姿：普段より全身を黒い布のようなもので覆っていて、その姿を見たものはいない。本人は昔賊に襲われそのときに酷い傷を負わされ、それを人目に晒したくないからと言っていたが・・・?

身長、体重共に不明

性格：寡黙で自ら人と接しようとはしない。常に妹である郭?と行

動を共にしている。口まで布で覆っている為、くぐもった声で話す。
武器：2本の銅鞭（双鞭）。鞭とはムチのことではなく、節のある棒状の打突武器のこと。

名：郭？ 字：不明 真名：白夜^{ビヤクヤ}

容姿：姉の李カクと同じく全身を黒い布で覆っている。やはり夜盗に襲われたとき酷い傷を全身に受けた為とのこと。

身長、体重共に不明

性格：姉と常に共に行動し他人とは相容れようとししない。この二人は常に二人同時に喋る。

武器：姉と同じ、2本の銅鞭（双鞭）。二人は戦闘も同時に行い、コンビネーションに特化した戦い方をする。1人1人なら霞や美命に到底敵わないが、二人なら恋とも数合は打ち合えるほど。

名：王允 字：不明 真名：双秦^{ソウシン}

容姿：一見、好好爺に見える風貌。

性格：狸爺

名：曹仁 字：子孝 真名：紫炎^{シエン}

曹操の従姉妹

名：曹洪 字：子廉 真名：空^{クウ}

曹操の従姉妹

この二人はちよい役っぱいなので設定を考えてない・・・

あと数人才リキャラ出るかも、展開しだいですが。

オリキャラ設定公開（後書き）

今回は幕間として高順と鏡華こと徐栄とのお話です。

本当はこの設定と一緒に投稿する予定でしたが、読み返してみたらおかしい所が出てきちゃいましたので、書き直してる最中です。数日中には投稿したいと思います。

誤字脱字報告・感想・要望などお待ちしております。
ではまた次回！

閑話その2 高順と鏡華〈前編（前書き）

番外編としてリクエストが多かった高順と徐栄の出会い話です。

1本に纏めようと思ったんですが、長くなりすぎるので前後編にしました。

分けたら前編は短めになっちゃいましたw

話自体は随分前に作ったのですが、出す機会がなかったためお蔵入りしてたのを書き直して投稿しました。

作った当時とは、徐栄の性格が随分変わってしまったので修正して載せましたが可笑しな所が出ちゃうかもしれません。

後編は大まかに変更しなくちゃいけないので多少時間かかりそうですが、なるべく早めに載せられるようにします。

閑話その2 高順と鏡華く前編

Side：徐栄

これはまだ黄布党が全国を荒らしまわっていた頃、拙者が高順殿とお会いした時のお話でござる……。

「張角たちの捕縛でござるか？」

詠殿に任務だと呼び出されてきてみれば、黄布党の首魁である張三姉妹が南陽で恋殿から逃亡した後、宛城に逃げ込んだとの報告があったそうでござる。

「張三姉妹は黄布の首魁でありながら、その正体はほとんど知られて無かったわ。人相はおるか性別さえもはつきりしなかった。けど恋が接触したおかげでだいたいのことは掴めたわ」

ふむ、先日の戦闘であと1歩のところまで袁術の領地に逃げ込まれたとか。

「今宛城は朱儁將軍が攻めてるはずよ。それで貴方達には援軍を率いていつてもらいたいの」

「なるほど、宛城を落とした際確実に張三姉妹を捕らえたいということではござるな」

今まで首魁の手がかりすら掴めず、いわば対処療法的に信者を討伐してきたが、頭を潰さぬ限り信者などいくら潰しても後から後から増えるばかりで一向に乱が収まる気配がござらん。恋殿のおかげで張三姉妹の正体が掴めた今、首魁を捕らえてこの乱を一気に鎮圧出来る好機というわけがござるな。

「それはいいのでござるが、拙者は張三姉妹の顔を知らぬでござるよ?」

人相書きでもあるのでござろうか?

「ああ心配しないで貴方達って言ったでしょ?」

拙者の杞憂は折込済みだとばかり詠殿が答えた。

「なるほど拙者1人ではないのでござったか、では恋殿か音々音殿が一緒に?」

すると拙者の問いに詠殿は首を振りながら

「違うわ、霞と華雄が兵を率いて黄布討伐に出陣し漣が任務でここを離れてる今、恋までいないと洛陽の守りが薄くなりすぎる。」

確かにあの姉妹だけでは不安でござるな、なんとなく信用もおけんし

「それに張角達を捕らえとなると、攻城戦の真っ只中に城に行くことになる。そんな中ねねを連れて行けるわけ無いでしょ?」

確かにそれは無謀でござるな。

「しからは誰が拙者と行くのでござる？」

他に張角の顔を知ってる者などいないはずだが？

「ふふ、もう一人三姉妹を見た人物がいるのよ」

と拙者の疑問に詠殿は笑顔で答えた。

それはいったい誰でござろう？

「援軍の将とは貴様か？、私が朱雋だ」

と立派な鎧に身を包んだ妙齡の女性が横柄な態度で挨拶してきた。
なるほどこの方が朱雋將軍でござるか。噂どおり傲慢な人物らしい
でござるな。

「お初にお目にかかります。董卓軍より援軍を率いてきました高順
と申します。隣は副将の徐栄」

「宜しく願いますでござる」

と高順殿に紹介され頭をさげる。

「ふん、まあ援軍など必要ないが折角来たのだから働いてもらうか
な」

とか偉そうに言っていてござるが、実際はもう1月以上城を落とせず苦戦していると聞き及んでござるよ。

「して状況は？」

と高順殿は朱雋の口ぶりなど気にもしない様子で質問をした。

申し遅れたが此度拙者と共にこの任務についたこの御仁は「高順」殿、わが軍の新参の将であり詠殿の言う「三姉妹の顔を知るもう一人の人物」でござる。拙者は軍を率いて戦うのは得意ではござらんゆえ、此度は高順殿が主将となつたわけでござる。

「ふん、我軍はこの宛城を完璧に取り囲み敵を兵糧攻めにしてる所だ」

完璧に、でござるか。その割には張角達が逃げ込んだらしいでござるが・・・。

「・・・なるほど、お互いの兵数は？」

「敵は5万、我軍は7万、貴様達は？」

「は、3万ほど率いてきました」

「とすると敵の倍の兵数か、これは楽勝だな」

・・・おいおい本気でござるか？確かに籠城してるとはいえ所詮敵はただの賊徒。訓練された正規兵とは比べ物にならんし率いてる将も、韓忠、孫仲・趙弘と見るべきところもないような人物ばかり。かと

いってそのように油断していると足元をすくわれかねんでござるよ。

「・・・して朱儁殿、城を攻めるにあたり何か策でもおありですかな？」

高順殿はそう尋ねられたが、その御仁が何か考えてるようには到底思えぬのだが・・・。

「策？策など弄さずともこのまま城を囲んでいれば、兵糧が尽きて降伏してくるであろう？」

「しかしあまり時間をかけすぎると敵に援軍が来るやも知れませんが、それにあそこには張角達が逃げ込んだとの噂もありますゆえ、敵が窮鼠と化し必死になるやも知れませんが」

それにあまり手間取つてると朝廷や他の諸侯から朱儁殿が侮りを受けますぞ。まあ我らには関係ござらんが・・・。

「ならばそなたには何か策があると申すか？」

と苦々しげに問う朱儁殿に高順殿は

「策というほどの物ではありませんが」

と作戦を説明し始めたでござる。

後半へ続くでござる。

閑話その2 高順と鏡華ゝ前編（後書き）

誤字脱字報告・ご意見・感想などお待ちしています。

閑話その3 高順と鏡華ゝ後編（前書き）

遅くなりました。やっと投稿です。

閑話その3 高順と鏡華、後編

Side：徐栄

宛城を落とすべく作戦が開始された。

高順殿が示した策自体は単純なもので、夜陰に乗じて数名が城門の内部に侵入し死角にて火を放ち敵が混乱してる中、内部より城門を開け四方から一気に突入し城を制するというものでござる。

侵入する数名は拙者の直属の部下である鴉からすにやらせれば問題ないでござる。

鴉とは諜報だけでなく破壊工作から暗殺まで行なういわば裏の細作でござる。

その実力は一人一人が武將並みという実力者揃いでござる。

夜盗如きが立てこもる城に侵入するなど、お茶の子さいさいでござる。

ただ今回の拙者達の使命は『張三姉妹の捕縛』でござる。

捕縛が難しい場合は殺しても構わんでござるが、あの城に三姉妹がいるのか確実に確認する必要がござる。その為、騒ぎになる前に拙者達だけで城内に先行する必要がござる。

拙者達だけならさほど困難ではござらぬが、生憎拙者らは三人の面相を知らぬゆえ、唯一面識のある高順殿にも来ていただけねばならん。

高順殿の武の力は相当なものとお見受けするが、こういう隠密作業には慣れてござらんだろう。

はてさて難儀なことでござる・・・。

侵入部隊に混ざって拙者らも城の敷地内に潜入した。驚いたことに高順殿は鴉の精鋭と変わらぬ動きでこちらについて来た、少々高順殿を侮っていたでござるかな。

ちなみに朱儁將軍には捕縛命令のことは伝えず侵入部隊の指揮をする為と言つてあるでござる。あのような御仁に本当のことを言えば、「手柄を横取りする気かー」となつて作戦が目茶苦茶になるやもしれんでござるからな。

城内の敵の有様は酷いものでござつた。

賊なのだから当たり前なのかもしれぬが、規律もなく皆が酒を飲みだらしく酔つていた。

おかげで侵入後の搜索も危なげもなく捗つてござるが、このような敵が立てこもる城を一月かかつて落とせないとは、やはり朱儁將軍は無能でござつたな。

拙者らは手分けして搜索したがそれらしき人物は見当たらず、数名の賊徒を捕らえ尋問もしてみたが皆「知らぬ」の一点張りで埒が明かなかつた。そんな人物はいないのか、下っ端には知らされてないのか・・・。

作戦開始まであと四半刻（30分）ほどとなり、そろそろ各所で陽動が始まるつと言つ時間になつてもそれらしき人物の影すら掴めず少々気が焦つてきた頃、部下の一人が妙に警備が厳重な部屋があると報告してきた。

部下に案内させその部屋とやらに行ってみると、部屋の前に数名の見張りがある部屋があった。
拙者は高順殿に確認してから部下に命じ見張りを始末させ、部屋の様子を探ってみた。

「・・・うつ、あ、ああ・・・」

部屋を覗いた拙者は一瞬呆気に取られてしまった。
部屋の中にいたのは、数名の男たちに組みふされるようにして犯される3人の女性でござった。

「つく」

さすがに目を逸らしかけた拙者であったが、

「・・・捕らえよ！」

との高順殿の命にて我に返り、部下と共に男たちを全員捕らえた。
どうやら薬物をやっていたようで男女共、反応が鈍かった。

「阿片か・・・。」

高順殿の呟きどおり相当の量の阿片をやっていたようでござるな。
特に女性の方は酷うござった。

三人のうち、二人はすでに事切れてござった。
男達もすでに正常な判断が出来ず、女性が死んでいたことに気がついていなかったか、それともあえて死姦していたのか・・・。

いずれにしろ録でもないことでござるな。

男共を縛り上げ、高順殿が女性を確認したが

「違うな、張角達とは似ても似つかない」

とのことでござった。

その後多少意識のある者を尋問したが、この城に女性はこの三人しかいないとのこと。

どうやら無駄足であったようでござる。

「「うわあああー」」

とそのとき外で騒ぎが起こった、どうやら陽動が始まったようでござる。

拙者らも早く引き上げねば、と思ったとき

「うつ、うがあああアあー」

と、それまでぐったりとしてた生き残りの女性が、急に暴れだし高順殿に襲い掛かった。

どうやら幻覚作用が出てるようで、激しく暴れ高順殿に暴行を加えていった。

拙者らはすぐに女性を取り押さえようとしたが、高順殿がそれを制した。そして

「大丈夫、大丈夫だから・・・。」

と女性の頭をずっと優しく撫でていたでござる。

どれくらいそうしていたか、あれほど激しく暴れていた女性すっかり大人しくなり、今では高順殿の腕の中で目を細めて気持ち良さげな顔をしてるでござる。

それを見る高順殿は悲しげな目をしてござったが・・・。

その光景に目を奪われてたせいか、一瞬殺気に気づくのが遅れたでござる。

シュバッ

部屋の死角から高順殿に向けて矢が放たれた。

対応に遅れた拙者が「不味い！」と叫んだとき、信じられぬことが起きたでござる。

なんと先ほどまでまともな意識すらなかった女性が、高順殿を庇って胸に矢を受けていた。

拙者が矢を放った賊を切り伏せたが、女性は助かりそうになかった。

高順殿が女性を抱きとめながら

「・・・なぜ・・・」

と悲しげに呟くと、女性が高順殿の顔を撫でながらフルフルと顔を横に振り、フッと微笑んで息絶えたでござる・・・。

高順殿は女性を他の二人と共に横たえると上に布をかけそつと目を

閉じた。

拙者は高順殿に声をかける事すら出来なかったでござる・・・。

その後攻城戦はこちらの策通りに進み、四方から攻められた黄布族は倍する敵にまともに反撃することも出来ず、守将である韓忠、孫仲・趙弘もあえなく討たれ宛城は官軍の手に落ちた。

宛城戦から数日後、洛陽郊外のとある場所

ここに名もなき三つの墓がある

その場所に高順殿が拙者を伴って来ていた。

「ありがとう君のおかげで俺はこうして生きていられる」

高順殿はその中の一つにそう語り頭を下げた。そしてやさしく

「今度は平和な世界で人として生きられるといいな・・・。」

と語り掛けたでござる。

そしてしばらくそうした後、拙者に向かって

「すまなかつたなつき合わせて、さて帰るとするか」

と言って高順殿は街に向かって歩き出した。

拙者はその後姿を眩しく見つめていたが

「どうした徐栄？」

との言葉に我に返った後、首を横に振り

「鏡華でござる」と真名を告げた。

行き成りの事に高順殿は、少々呆けた後

「いいのか、それは真名だろ？」

と問いかけてきたので拙者は

「貴殿には真名で呼んでほしいでござる。だめでござるか？」

と逆に問いかけてみた。

高順殿はふつと微笑んだ後、

「いやありがたく受け取るよ宜しくな『鏡華』俺は知っての通り真名がない、呼びやすいように呼んでくれればいい」

と言って手を差し出してくれた。

拙者はその手を握り返し

「宜しくお願いするでござるよ。殿（との）」

と笑顔で答えたでござる。

閑話その3 高順と鏡華、後編（後書き）

ご感想・誤字脱字報告などお待ちしてます。宜しく願いします。

次回より本編再開予定なのですが、短い拠点話を入れるかも知れません。

どちらにしろ今回より早く投稿できたらいいのですが・・・。

閑話その4 月と詠のある昼下がり（前書き）

作者にしては珍しく連日というか連続投稿

本編で酷い目に会っている二人のお話です。
なるべくほのぼのする話にしたつもりです。

いつもの半分くらいの長さですが、さっきなんとなく思いついた話
です。w

ではどうぞ

閑話その4 月と詠のある昼下がり

ある日の午後

その日の公務が珍しく早めに一段落した月と詠は、久しぶりにゆったりとした時間を過ごしていた。

「ねえねえ詠ちゃん、聞いてもいいかな？」

侍女が持つてきてくれたお茶菓子など摘みながら、お茶を楽しんでいた詠に月が声をかけてきた。

「うん？ なにかな月」

普段は仕事に忙殺され、月とゆっくりお茶の時間など持てない詠は上機嫌だった。

まあ、普段忙しいのは主に仕事をサボる連中のせいで詠の仕事量かとんでもない量になってるせいだが。

霞とか華雄とか恋とかねねとか……。

あれ？ちゃんと仕事してる方が少ないぞ？

なんだか泣きたくなる詠だったが、今日はそんなことも忘れられそうなくらい気分がよかった。

「……あのね、詠ちゃん」

とモジモジしながら上目使いで見つめた後

「詠ちゃんって高順さんのこと好きなのかなあ？」

と、とんでもない爆弾を投下してきた。

「・・・ぶつぶつぶウウ」

「へ、へうゝ詠ちゃん汚いよ」

顔に飲んでいたお茶を吹きかけられ、顔をしかめる月だったが詠はそれ所ではなかった。

「なっとなななっ何、言ってんによよヨっゆっゆ、月！僕があんなやつ好きになるわけないじゃない！！だいたいなんであいつの名前が出るのよ・・そりや確かに頼りになるし案外やさしいところもあるけど、それだけよそれだけ！所詮あいつは僕にとっては役に立つ手駒なんだから、月を守る道具にすぎないんだから！本当よ本当なの！ねえ信じてよ月！！」

「落ち着いて、詠ちゃん。わかったから落ち着いてよ、ね？」

本音が駄々漏れになってる気もするが、とにかく詠を落ち着かせる月だった。

「だいたいなんでまた急にそんなこと言い出したのよ？」

しばらくしてやっと落ち着いた詠が月に問いかけた。

「そ、そのね、詠ちゃんと高順さんって最近いつも一緒にいるし、それに二人ともお似合いだからその・・・ポツ／＼」

「いや、ポツて何よポツて！顔を赤らめるんじゃない」

「でもね詠ちゃん、ああ見えて高順さんって意外に女の人に人気あるから気を付けなきゃ駄目だよ？」

「お願い人の話を聞いて・・・。」

「霞さんとも気が合うみたいだし、鏡華さんも美命さんも好意を寄せてるし恋さんも懐いてるし・・・だから、がんばってね、詠ちゃん！！」

「だからね・・・人の話を・・・聞いて・・・。」

平和な午後の昼下がりでした。

閑話その4 月と詠のある昼下がり（後書き）

感想・誤字脱字報告・要望などお待ちしております。

やまなし、落ちなし、情けない・・・。

ま、これはこれで拠点話らしいかもw

次回より本編に入ります。

ではまた～

第二十四話 長安脱出編 その1 (前書き)

久しぶりの本編です。
ではどうぞ～

第二十四話 長安脱出編 その1

連合との戦闘中、急にもたらされた撤退せよとの勅命
不審な点を感じ調べてみると月、詠が長安にて監禁されてること
また帝の勅命を語りこの一件を企んだ人物も判明
さらに長安にて月の護衛をしてた「李カク、郭？」も裏切ったとも
窮地に立たされる董卓軍、そして高順であつた…。

S i d e : 高順

「さてもはや一刻の猶予もない、すぐに行動に移るぞ」

月・詠の危機をしつた俺は主だった将とこれからの行動について話し合っていた。

「行動するって具体的にはどないすんねん」

霞の疑問に俺は頷きながら答えた。

「まず部隊を分ける、長安にて2人を救出する部隊と？水関を放棄し本隊を虎牢関まで撤退させる部隊だ」

「？水関を放棄するんかいな！？」

俺の言葉に霞は驚きの声を上げた。
周りを見渡せば他の面々も驚きを隠せないようだ。

「うん、これには2つ理由がある。1つは王允たちの目を誤魔化す為。こちらが勅命にしたがって撤退を始めたと思わせること。もう

1つは連合に対する時間稼ぎだ。月たちが捕らわれてる以上、積極的に戦うわけにはいかない。いまなら敵もまさかこちらが？水関から撤退するとは思わぬだろうから、数日は時間を稼げるはず。それにタダで？水関をくれてやるつもりもないしな」

と理由を話すと皆納得してくれたようだ。

「…まあ、あくまで時間稼ぎ程度にしかならないだろうがな」

と皆には聞こえないようにボソツと漏らす。

王允の使者を斬ってしまった以上、時間をかければ疑いだすだろうし……。

「とにかく連合に今の状況を悟られる前に二人を助け出す必要がある。すぐに動くぞ」

皆が頷くのを見て策を話し出す。

「まず長安に向かう部隊だがこれは少数でいく。大人数でいくと敵に察知されるし潜入しにくくなる。将は俺と鏡華、それに鴉から30人ほど率いてく」

「承知したでござる」

となぜか嬉しそうに言う鏡華、やはり自らの手で月たちを救いたいのか。

「霞と美命は虎牢関まで部隊を撤退させてくれ」

「わかったで」

「…」

勢い良く答える霞に反して美命はなぜか黙ったままだ。気にはなるがとりあえず続きを話そう。

「？水関を放棄する際は空城の計を仕掛ける。」

「空城の計？」

霞の疑問に俺は頷きながら答える

「まず敵に悟られぬように夜陰に紛れて？水関から撤退してくれ。先日の敗北もあり連合もすぐには撤退したとは思わないはずだ。撤退に気がついたとしても曹操や孫策などは罨を考慮して慎重になるだろうが、袁紹達は我先にと？水関に乗り込んで来るはずだ」

なんせ馬鹿だからな、と言うと皆すぐ納得したようだ。

「そこへ罨を仕掛けておいて連合に打撃を与えれば、糧食が不足していることもあり、連合は？水関に留まって立て直しを図るはずだ」

それで時間が稼げるはずだと。

「罨に関して撤退する場合を考えて、用意はしてある。設置などに関しては鴉の工作員に任せる」

と、鏡華に視線を向けるとわかったと頷いた。

「本隊は虎牢関に退却したら恋達と協力して籠城して時間を稼いで

くれ。虎牢関が突破されると洛陽まで遮るものがない、くれぐれも恋が突出しないよう説き伏せてくれよ？」

「自信ないわ」

と苦笑いを浮かべる霞の横で、美命が黙ったまま何かを考え込んでいた。

さつきから何か変だな。

美命の態度が気になった俺は、話を聞いてみることにした。

S i d e : 美命

「どうした美命？何か気になる事でもあるのか」

私が思い悩んでいると高順が話しかけてきた。

いかなんな態度に出ていたか…。

しかしどうせなら私の思いを聞いてもらおうか。

私はさつきから思っていたことを正直に話してみることにした。

S i d e : 高順

「高順、私も長安に連れて行っってはくれまいか？」

俺の問いかけに美命は半場予想通りのことを言ってきた。
やはり月の危機に黙ってられないのだろう。しかし

「気持ちわかる。お前にとって月は特別な人だし、自らの手で助け出したいのだろう。しかしお前までこちらに来てしまったては、本隊の指揮が手薄になってしまう、それに…人には向き不向きと言うものがある。」

言いづらい事だが、ここははっきり言わなければなるまい。

「正直、美命は隠密行動には向いていない」

俺も向いているとはいいがたいが、それでも以前鏡華と宛城に潜入した経験がある。

「…それは承知しているつもりだ。だがそれでも私は月様を助けに行きたい。頼む高順けっして足手まといにはならん。なんとか連れてってほくれないだろうか？」

「うん」

美命の気持ちはわかるし、ここ最近の美命なら大丈夫だとは思っただが

と思い悩む俺に意外な人物から賛成の声が上がった。

「連れてってやってくれへんか高順？」

「…霞？」

「撤退の指揮だけやったら、うちだけでもなんとかなる。気持ちも判るし、それに今の華雄っちなら足手まといにはならへんやろ」

「霞、お前」

美命が霞の意外な反応に驚きを見せると、霞は頭をかきながら照れ笑いを浮かべた。

美命はいつの間にか霞にここまで信頼されるまでになっていたのか……。

「そうか判った、美命も一緒に長安に来てくれ」

「わかった…ありがとう霞」

美命が小声で礼を言うと霞は「礼なんて言われるとむず痒くなるわ」と照れていた。

「よし、鏡華は連れて行く鴉の選別と罾の準備、霞は撤退の準備を連合には米一粒残すなよ、美命は馬の準備を不眠不休で長安を目指す代え馬も忘れるなよ、俺は糧食などの準備をする、長安組は半刻後（約1時間後）には出るぞ」

「…「応」」」

「あ、鏡華はちょっと残ってくれ」

それぞれが準備に向かう中、俺は鏡華を呼び止めた。

「なんでござるかな？殿」

「…今回のこと、王允たちが連合の一部の諸侯と通じてる可能性がある。万が一にも今の状況を知られるわけにはいかない。そこで王允たちの密偵が連合と接触しないよう鴉には充分気をつけさせてく

れ」

「承知したでござる、では」

指示を出す為に出て行く鏡華を見ながら、俺も自分の仕事をする為に部屋から出て行った。

第二十四話 長安脱出編 その1（後書き）

感想などお待ちしております。

第二十五話 長安脱出編 その2（前書き）

驚くほど話が進まない……。

第二十五話 長安脱出編 その2

？水関より長安を目指した高順達は、ほとんど不眠不休で道程を駆け抜けた。

睡眠は交互に馬の上で行い、食事馬馬上で食べ一路長安を目指した。そのおかげで通常の三分の一ほどの時間で、目的地へとたどり着いていた。

長安郊外

S i d e：高順

「物見から帰った鏡華によると、見張りは確かに厳重だが長安の街への出入りは禁止されたわけではないらしい」

「それは我らには有難いが、しかし何故だ？」

美命の疑問も最もだ。今の時期我らが月達を奪還しに来ることを警戒して、街への出入りを出来ないように城門を硬く閉じていてもおかしくないものだが、こんなにも早く我らが来ることを予想出来なかったとか？それにしてもな…。

するとそんな俺達の疑問に鏡華が答えてくれた。

「殿、長安は漢の皇祖が都として築いた街でござるが、都として長く栄えなかった二つの理由があるのでござるよ」

「ほう」

「一つはこの土地の土質が粗く硬い為、地下水が塩分を多く含んでいて飲むに耐えられないでござる」

「ふむふむ」

「もう一つはその為山野に木々が育ちにくく、常に燃料不足になるのでござる」

「なるほどつまり生活物資が不足になる為、つねに領民たちは城外に取りに行かなければ生きていけないというわけか」

「そういうことでござる」

なるほどこれならば領民に紛れてなんとか入り込めそうだな。

「今ならばこんなに早く我らがつくとは思ってはいまい。今のうちに領民に紛れて城下に侵入するぞ。纏めて入るといくらなんでも怪しまれる、数名ずつに分かれていこう。それと鴉のうち三名ほどここに残って馬の見張りを頼む。問題は侵入後どこに集まるかだが」

三十人近い人間が集団で行動すれば嫌でも目立つ、なんとか拠点を確認したい所だが…。

すると美命が「それならば私に心当たりがある。」と言って来た。

「月様と親しく付き合いのある商人が、長安のほうに店を構えているのだ。私も何度か店で会ったことがあるが中々気持ちのいいやつだった。人物としても信用が置けると思う。」

「ああ思い出したでござるー」

と美命の話を聞いてた鏡華がいきなり声を上げた。

「拙者も何度かお世話になったが、なるほどあの御仁なら信用してもいいでござるな」

ふむ、二人がそこまで買っている人物なら間違いはないのだろう。

「して、その人物の名は？」

「たしか張世平とかいったはずだ」

……。

？水関、連合本陣

S i d e：桃香

初戦の敗北からなんとか軍を立て直した私達は、再び？水関を攻める為軍を進めた。

でも今の連合内の状況は最悪だと思う。

糧食も尽きかけてるし（お腹減ったよ〜）

先の敗戦の原因を巡って皆が疑心暗鬼にもなっている。

特に総大将の袁紹さんは、前回の戦いで被害のなかった曹操さんと孫策さんが董卓軍と内通してるんじゃないかって疑ってるみたいだ

って朱里ちゃんが言っていた。

なんで皆仲良く出来ないんだろう

私達の目的は『苦しんでいる洛陽の民達を救うこと』

その為には皆で力を合わせて民達を苦しめてる董卓さんを懲らしめなきゃいけないのに…。

仲間内で疑いあつてる場合じゃないのに…。

でも義勇軍にすぎず、実績もない私たちの発言は軍議でもろくに取り上げてもらえない。

くやしい…やっぱ弱い民達を救うには言葉だけじゃ想いだけじゃ駄目なのかな…。皆が幸せに暮らせるようにするには強い力があるのかな…。

私にもっと強い力があれば、こんな戦いなんてすぐにも終わらせて困ってる人達を救えるのかな？

だったら力が欲しいな、皆を救うため皆が笑…笑…てられる世界を作る為の強い力が…。

「…香様」

…違う、何言ってるんだろう私、力づくで相手を従えさせようとするなんて間違っている。

「桃香様」

まず相手とちゃんと向き合って話し合うことが大事なんだ。

「桃香様！」

お互いに相手の気持ちになって話し合えばわかり合える、そうすればきつと…

『と・う・か・さ・ま！』『っひゃ、ひゃい！』

「どうなさったのですか桃香様？」

「あ、愛紗ちゃん、びっくりさせないでよ」

急に大きな声で呼ばれてびっくりしてしまった。

すると愛紗ちゃんはすまなそうに俯きながら

「いえ何度かお声をお掛けしたのですが…何やら悩み事があるように見えましたので、その…」

そうだったんだ、いけないいけない愛紗ちゃんたちに心配をかけちゃってたか。

私は強めに頭を振りながら

「大丈夫、心配しないで、ちょっとした考え事してただけだから」

「そうですか…」

愛紗ちゃんは納得はしてないようだけど、引き下がってくれた。

「そ、それより朱里ちゃん、軍議のほうはどうなったの？結論は出たのかな」

と話を逸らそうと私は傍にいた朱里ちゃんに話を振った。

「は、はい一応ですけど結論というか方針が決まりました。」

そうなんだ良かった。ずっとあのままだったらどうしようかと心配しちゃった。

「それでどうなったのかな？」

「はい、我々は明朝、日の出を持って？水関に総攻撃を加えます。」

やっぱり戦うんだ、でもしかたないよね洛陽の民達を救うためだもん

「そうか、で朱里よ陣容はどうなっているのだ？」

朱里ちゃんの言葉を受けて愛紗ちゃんが質問をする。

「まず先陣は曹操、孫策の二陣営。どうやら袁紹さんが両陣営を疑っているみたいで、身の潔白を晴らす為にもと先陣を押し付けたようです」

…そうか、まだ味方を疑っているんだ、なんだか悲しいな。

「袁紹さんが中央本陣として、袁術さんがその左翼、右翼に馬超さん」

「で朱里ちゃん私達はどこかな？」

すると朱里ちゃんはちよつと困った顔で

「えつとですね、私達はその初戦で殆どの兵を失ってしまいましたので、その、戦力として数えられてないと言うか、遊軍として後方で待機してると…」

「なんだと！それは本当か朱里！？」

朱里ちゃんの言葉を聞いた愛紗ちゃんが、そう言つて詰め寄る

「えつとえつと、お、落ち着いてくらひゃいあいひゃひゃん」

「そ、そつだよ落ち着いて愛紗ちゃん」

激昂する愛紗ちゃんを二人で宥める

「し、しかしこの様な侮りを受けるなど私は我慢なりません！今から袁紹殿の所に行つて我らも先陣に加えていただいて、先日の雪辱を…」

「駄目だよ愛紗ちゃん！！」

「と、桃香様？」

「駄目だよ愛紗ちゃん、そんなこととして本当に私たちが先陣になつちやつたら今度は皆死んじやう…。愛紗ちゃんも鈴々ちゃんも朱里ちゃんも離里ちゃんも、それにそれに御主人様だつて…。」

「桃香様」

私は俯きながら言葉を続ける

「私だって悔しいよ。困っている人達を助ける為、力になる為に連合に参加したのに、何にも出来ない自分が…」

私は顔を上げ愛紗ちゃん朱里ちゃんの目を、代わる代わる見つめながら思いの丈を語る

「でもここで私達が死んじゃったら何にもならない、無駄死にだよ…。私はこの乱世で困ってる人達を皆助けたい、その為の力になりたい、だからこそどんなに悔しくたって私たち自身が無駄に命を散らすようなことをしちゃいけないんだ。」

私は愛紗ちゃんの両手をギュッと握りながら力いっぱい言った

「だから愛紗ちゃん、今は自分達に出来ることをしよう？どんなに小さなことでもいい精一杯やっていけばその積み重ねは無駄にはならない、きつといつか皆を救う力になるから…。」

そう語る私の両目からはいつの間にか涙が溢れていた。

「判りました桃香様、すみませんつい我を忘れてしまいました。お許し下さい」

そう言う愛紗ちゃんの目にも涙が浮かんでいた。

「ううん、いいんだよ愛紗ちゃんが怒ったのだって皆のことを思っただってわかってるから」

そう言って私達は微笑みあつた……。

「そういえば朱里ちゃん、御主人様達はどうしたの？」

さつきから他の皆を見かけないと思った私は朱里ちゃんに聞いてみた。

「はい、御主人様と雛里ちゃんは他の諸侯の皆さんに何とか糧食を分けてもらえないかと交渉に」

「そうかもうご飯余り残ってなかったね」

私の言葉に申し訳なさそうな顔になる朱里ちゃん。

「朱里ちゃんのせいじゃないんだから、そんな顔しないで」

「はい、それと先ほど白蓮さんの所にも頼みに行つたのですが、白蓮さんも殆どの糧食を失つたらしくて私たちに回せる分はさすがにないと……。」

そうだね。いつもいつも白蓮ちゃんを頼るわけにはいかないよね

「それで鈴々ちゃんは？」

「しよしよれが、（あう噛んじやつた）鈴々ちゃんは美星ちゃん（みほし）と一緒、『山で食料を調達してくるのだー！』と言つて、その」

「わ、私は止めたのですが」

そうか、鈴々ちゃんらしいね。どんな時でも前向きだ、私も見習らなきゃ！

「さ、愛紗ちゃん朱里ちゃん私たちもいくよ」

そう言って二人の手をとり立ち上がった。

「行くてどこにですか桃香様？」

慌てる愛紗ちゃんに笑って答える

「『私たちに出来ることをしに』だよ！」

第二十五話 長安脱出編 その2（後書き）

桃香の独白話になってしまった。

感想などお待ちします。

第二十六話 長安脱出編 その3（前書き）

遅くなりました。

今まで小説を書いていたPCがお亡くなりになりました（マザーボードとその他が逝っちゃったらしく修理すると新品買つのと変らないくらいかかるといわれ、泣く泣く処分することに）PCは古い型のがしまつてあったのでそれで代用したのですが、小説のネタとかのデータが前のに入っていたので書き直したりしてたら遅くなりました。

第二十六話 長安脱出編 その3

少数数に分かれて長安に無事潜入を果たした高順達は、鏡華の案内で「張世平」の元を訪ねようとしていた。

S i d e : 高順

長安へと潜入した後、月たちに関する情報と当面の活動拠点を求めて、以前から美命達とも親交のあるという「張世平」なる商人の店に来ていた。

全員では目立つ為、俺と美命、鏡華の三人だけで訪れ、鴉の面々には街で情報収集に当たってもらっている。当然俺たちも武具などは外し町人のような格好で来ている。（鏡華だけは暗器を隠し持っているが）

店の者に美命が何かを告げると、奥に通され主人が来るのを待たされることになった。

「…殿」

暫くし待っていたら鏡華が小声で話しかけてきた。

「どうした？」

「ここまで来てから言つのもなんですが、あまり商人というものを信頼しない方がいいでござるよ」

「うん？張世平殿は信頼出来そうなんじゃなかったか？」

確か鏡華も『信頼出来そうな人物だ』と言ってた筈だが。

「張世平殿がどうということではなく、『商人』という人種自体が拙者はあまり信用が置んでござる」

ふむ言いたいことはなんとなくわかるな、商人は我ら武士と違って『利』で動く。

商売事に義理や人情など挟まないからな。

そこに『利』があればどんな人物とも手を組むし、『利』がなくなれば簡単に切り捨てる。

前世では殿もよく痛い目にあっていたからな。しかし

「気持ちには判るがとりあえず会って見るしかあるまい。拠点もそうだが月達の情報がほしい、鴉の情報収集の能力の高さは知ってるが今は一刻を争う、だが忠告は有難く受け取っておくことにしよう」

俺の言葉を聞いて鏡華はとりあえず頷いた。

さてどんな人物かな……。

しばらくして主人である張世平が部屋に入ってきた

「お待たせして申し訳ありません、私がこの店の主人張世平でございます」

と頭を下げてきた。

見た所歳は四十そこそこであろうか、愛想よくニコニコ笑っているが腹の底は見せないな

「いやこちらこそいきなり押し掛けて申し訳ない。改めまして拙者は高順と申す者以後お見知りおきを」

と挨拶を交わす

「高順様でございますね、宜しくお願いいたします。それと徐栄様、華雄様もお久しぶりでございます」

そつか二人は張世平殿と顔見知りだったな

二人とも「ああ」といって軽い会釈だけしている、旧交を温めてる場合でもないか

「それで此度私めをお尋ねになった御用は？」

二人の態度で危急の用件だと察したか、張世平殿が本題を振ってきた。

ここは正直に話して反応を見るべきか

「実はお頼みしたいことがあります、今日尋ねてきたしだいです」

すると張世平殿は目を細めながら

「たとえば董卓様達が監禁されてる件とかですか？」

と切り出してきた。

鏡華が『やっぱり油断できん』と言う顔になるが、俺は逆に感心した。

月達が監禁されてることは、まだ誰も知らないはずだ。それを知っているということは特殊な情報源を持っているのだろう。それを惜しげもなく晒すとは俺たちに対して敵意のない事を示すためか。

「知っているならば話は早い。聞けば貴殿は月達とも親交があったとのこと、単刀直入に申す、月……いや董卓様をお救いするために貴殿の力を貸していただきたい。」

と頭を下げ懇願する。すると、

「ふむ……。 」と張世平殿は難しい顔をして考え込んだ。

その対応を見た鏡華は、周りに気づかないように懷に手を伸ばす。

ガッ！

張世平殿が引き受けてくれなかったら、始末する気か。

それに気づいた俺は目線で鏡華を制す。

鏡華は納得しがたい顔ながら、懷に伸ばした手を戻してくれた。

まったく、気持ちはわからんでもないが、こんなところで騒ぎを起こす気か。

それに本来ならまったく関係のない張世平殿を巻き込もうとしてるんだ。たとえ断られても、たとえ敵方に密告されようともそれを恨むのは筋違いだ。こちらが不義理な真似をしてどうする。

しかし先程鏡華が懷に手を伸ばしたとき感じた殺氣と物音はなんだ。大方用心棒といったところか？

しかし直前まで存在すら感じないほど氣配の消し方といい、一瞬感じさせたあの殺氣といい只者ではないようだが……。

鏡華と美命も氣づいたか油断なく構えている。

「……わかりました。高順殿、私で宜しければお力をお貸しいたしましょう」

そんな中、張世平殿の声で俺は思考を中断し意識を其方に向けた。

「本当ですか！ 忝い」

そう言つて頭を下げた後、ふと疑問に思ったことを聞く

「しかし頼んでおいて問うのも何ですがそのように簡単に決めてしまつて宜しいのか？」

すると張世平殿はにこりと微笑んだ後問いに答えてくれた

「我ら商人にとって一番大切なのは世の平穩です。世の中が平和であればこそ我らも安心して商いに精が出せるといふもの、残念ながらもはや漢王朝は傾きもはや大陸を統べる力は皆無でしょう。それは黄布党などの匪賊の横行、それに今起こっている戦を見てもあきらかでしょう……。なれば帝にvariこの大陸を新たに統べてくれる英雄に登場していただきたいと存じます。」

…… 大胆な発言だ。

今のは不敬罪と取られてその場で首を刎ねられても文句が言えない

ほどだ。だが張世平殿が言った事は俺たちも皆感じていることだ。帝に力があれば此度のような反董卓連合など起こりえなっただろうし、王允などが勝手に動き回ることなかっただろう。だが

「それは今回力を貸してくれる理由になっていないと思うが、それともまさか董卓様にその『英雄』とやらになれとでも？」

ありえない話した、月は本来争いの好まぬ性格だ。力なき民や仲間を守るためには戦うことを辞さないだろうが、自ら好んで戦いを仕掛けたりする娘ではない。

「それはありえんな、董卓様は帝を裏切るような真似は死んでもなさぬだろう。英雄とやらがほしいのなら反董卓連合に手を貸したほうがいいのではないか？あそこには自らが大陸を統べる者になりたいような野望の持ち主がゴロゴロいるだろう」

主に曹操とか袁紹とか……。

「さようでございますな。しかし自らの欲の為になんの落ち度もない董卓様を集団で貶めようとするような輩をどうも私は好きになれないですよ。」

それにと話しを続ける。

「私はあのお方が好きなのですよ。あのお方が洛陽^都に来て下さってから洛陽もこの長安もずいぶんと住み易くなりました。街が活気にあふれ犯罪なども減り皆が笑顔を見せるようになりました。それにあのお方は我ら下々の者にも分け隔てなく接してくれます。私はあのお方が見せる幸せそうな笑顔が大好きなのですよ。本当の所大陸の平和とかは二の次なのですわ、ただあのお方にはいつも笑顔でい

てほしい、それが一番の理由ですか」

と屈託のない顔で笑いながら告げた。

なるほど確かに気持ちのいい男だ。こちらがあれこれ疑っていたのが恥ずかしく思える。

「そういうことなら納得できます。疑って申し訳なかった、いろいろと迷惑だろうが力になっていただけますかな」

とこちらが差し伸べた手を握り返し

「こちらこそ」

と笑顔のまま握り返してきた。

「では張世平殿、さっそくいろいろとお聞きしたいが、その前にこちらの方を紹介していただけますかな？」

と先程物音のしたほうに視線を向ければ、

「ふむ、やはりばれてましたか、張世平殿しつれいしますぞ」

との声と共に扉が開き、一人の女性が姿を現した。

「やれやれ、やはり私に間諜のような真似は似合いませんな」

とにやりと笑った女性は、青い髪に白い浴衣のような者を身に付け、白銀に輝く槍を持ち涼やかな瞳でこちらを面白そうに見つめていた。

第二十六話 長安脱出編 その3 (後書き)

最後に出てきた女性は誰でしょね？
ってばればれかw

第二十七話 長安脱出編 その4（前書き）

話が進まないので、なるべく多く投稿したい

第二十七話 長安脱出編 その4

Side：高順

「私は姓を趙、名を雲、字を子龍と申す。以後お見知りおきを」

先程の女性がそう名乗った。

趙子龍か前世では覚えのない名だが、目の前の女性は只者ではない。

凜とした佇まいといい、自然体でいながら隙のない所といい

「お初にお目にかかる拙者は高順と申す者、字は訳あってありませんが…以後よろしく」

字がないと聞いたとき少し不審がる素振りを見せたが、すぐにそ知らぬふりをしてきた。中々食べぬらしいな。

「趙雲殿と申されたか、失礼ですが張世平殿とはどういったご関係で？」

「いやなに、拙者は世を知る為に他に二人ほど連れ立って旅をしておりましてな。だがいかんせん路銀が心もなくなりましてな、そんな折張世平殿が商品の仕入先からの運搬の護衛を募集してましてな、渡りに船と飛びついた訳ですよ」

「無事商品を店まで運び終えたのですが、先に起こった戦のおかげで趙雲殿達も旅を続けるわけにも行かず、とりあえず落ち着くまで私の客分という形でここにとどまってもらってるしだいでございま

す」

と趙雲殿の言葉を張世平殿が引き継いで説明してくれた。

「そうでしたか…それはそうと趙雲殿、貴殿は相当腕が立つと見ましたが？」

すると趙雲殿はにやりと笑い

「天下無双とまで喧伝する気はござらんが、そこらの将に遅れなど取らぬと自負してござるよ」

と自信満々に答えた。

「なるほど…そこで相談なのですが先程の張世平殿との話は聞かれていたかと思うが、よければ我々に力添えしてはいただけないだろうか？」

すると鏡華と美命が「高順（殿）」と声を上げたが、それを制して「どうかな？」と返事を待った。

「それはいい考えですなどうですか趙雲殿、私からもお願いする高順殿達にお力をお貸しくださるかな？」

と張世平殿も説得してくれた。

すると趙雲殿は少々考えた後

「そうですね、拙者は董卓殿に直接の面識はないが、都や長^こ安をここまで栄えさせた手腕といい民達に好かれる人望といいよき主君で

あるのはわかる。なにより張世平殿がそこまで慕う相手なら会ってみる価値があるでしょうな」

と言ってくれた。

「するとお力添えしていただけるか」

「うむ、この趙子竜の力存分にお使いくだされ」

「ありがたい恩にきる」

こうして頼もしい仲間を得た俺たちは、張世平殿から月達の現在の情報を得てさっそく作戦を練ることにした。

S i d e : 詠

僕は今、地下牢らしきところに捕まっている

李力ク、郭？に捕まった後、月とは引き離されそれ以来会えてない…。

僕が今死んだら都合が悪いのか、後で利用するつもりなのか知らないけど一応は治療を受けさせられた。

なんとかここを抜け出し月を助け出す算段をしたけど、非力な僕じや牢を破る策なんて思いつかない。

時々李カク、郭？が来て僕を嬲るような目で見ていく

その目を見ていると先日恐怖が呼び起こされ、心が折れそうになる
けど折れそうになる心を奮い立たせやつらの目を睨み返す

するとやつらは恍惚そうな喜色に満ちた瞳をこちらに向けてくる

怖い……まるで腹を空かせた獣の前に放り出されたようだ

怖い……立ち直った心がまた折れていく

月、皆、僕は……僕は……

S i d e : 曹操

連合本陣

「皆集まったわね」

我が軍の主だった将が集まったのを確認した私は声をかけた

「は、？水関の偵察に出てる空（曹洪）以外は皆います」

桂花の言葉にうなずき早速本題に入る

「皆知ってると思うけど明朝我らは孫策軍と共に？水関に先陣とし

て攻撃をしかける」

これは私達が敵と通じていると疑った麗羽や諸侯が、無理やり押し付けてきたのだけどまったく迷惑なことね。どうせ麗羽のことだから、簡単に敵の策に乗せられたのでしょうけれど、まあいいわここは大人しく策に乗せられてあげましょう。

「これを機に我らの名を上げる、それと？水関にいる三人の将、彼らを手に入れるわ」

「か、華琳さま！？」

ふふ、春蘭と桂花は慌ててるわね。でも神速と謳われる張遼、噂とは違い智勇を備えた華雄、そしてあの高順という男、あれらを手に入れれば私の覇道の役にかならず立つ

「どうしたの春蘭？まさか出来ないのかしら」

「そ、そのようなことはありません！かならずや奴等をひっ捕らえ華琳さまの前に差し出して見せます」

「ふふ、可愛いわね春蘭。期待に答えてくれたら、たっぷりと閨でご褒美をあげなくちゃね」

「か、華琳さま」

本当に単純で可愛い娘、秋蘭も目を細めて観賞してるわね、桂花は馬鹿にしてるようだけど

「さて桂花、あなたは？水関攻略の為の最善の策を示しなさい」

「は、ではご説明しま「お待ちください華琳さま！」誰よ！私の邪魔するのは」

桂花が策を話そうとするのを遮って、天幕に入ってきたのは？水関の偵察に出ていた空だった

「おかえりなさい空、どうしたのそんなに慌てて？」

まさに息も絶え絶えといった感じの空、何かまたややこしいことでもあったのかしら

「は、ただいま偵察より帰りました。華琳さま？水関には恐らく敵はほとんどいません」

「は？何を言ってるの、先の戦闘で向こうに被害はほぼ無かった。今の状況で向こうに撤退する理由なんかないわよ！」

確かに桂花の言う通りだわ、でももしそれが本当なら…

「空、？水関がもぬけの殻というのは間違いないわね？」

「は、城内にまで入ったわけではありませんが、城壁に接近してもまったく反応がありませんし、何より気配がまったく感じられません」

うむ、空ほどの者がそういうなら間違いはないのでしょう、そうすると撤退した理由は何？

都で何かあって急な撤退命令でも出た？それともこれは誘い込む為

の罨？それとも……

「桂花、今から孫策の陣に行くわよ」

「え、か、華琳さま！？」

「？水関が無人というなら罨が仕掛けられてるはず、そしてそのことをあの孫策と周瑜が気がつかぬわけない。ならばここは孫策軍と謀って麗羽に意趣返しをするわ」

彼女達も袁術に一泡吹かせたいだろうしね

「春蘭、秋蘭あなた達も付いてらっしゃい、空あなたはゆっくりと休みなさい」

さて見てなさい麗羽、この私に喧嘩を売ることがどうゆうことか思い知らせてやるわ

Side: ???

長安城内の一室

「ネエ オネエサマ ドウヤラ ドブネズミガ ハイリコンダヨウヨ」

「ウフフ ヨテイドオリネ エサニクライツイタ ドブネズミヲ
マトメテクジヨ シマシヨウカ」

「ネエ オネエサマ モウアノコ スキニシテモイイデシヨ ワタ
クシ アソコガホテッテ ガマンガキキマセンワ」

「ウフフ シカタガナイコネ イイワヨ デモスグニコワシタラダ
メヨ アナタハオモチャヲアタエルト スグニコワシチャウンダカ
ラ」

「ワカッテルワヨ オネエサマ ダイジニ カワイガッテアゲルワ
タップリトネ」

「ウフフフ」

Side：詠

……高順……僕は……。

第二十七話 長安脱出編 その4（後書き）

なんか死亡フラグが立ってる気がする

気のせいだね、たぶん…。

第二十八話 長安脱出編 その5（前書き）

まだ恋の出番が来ない……。

第二十八話 長安脱出編 その5

夜陰にまぎれて？水関から無事部隊を撤退させた霞は、虎牢関に入り恋達と合流を果たしていた。

S i d e : 霞

ふう〜なんとか虎牢関まで無事辿り着いたで、恋達に会つのもひっそしぶりに感じるで

本当なら無事再会出来たことを喜ぶべきなんやろうけど、今の状況じゃそれは無理やな

さて、皆とこれからのことを話し合わなきゃいかな

こちらに小走りに向かってくる恋達を見ながら、うちは高順達は無事やるか？とふと思った。

S i d e : 高順

張世平殿から月達の情報を得ながら俺たちは、救出作戦を話し合っていた

「…すると月は帝と共に軟禁状態にあると？」

俺の質問に張世平殿は頷きながら答えた

「さようです。一応は帝に対する配慮か礼節を持って扱われているようでございます。見張りは付けられているようですが、今のところ無事のようにございます」

張世平殿の言葉を聞いた美命がほつと息を吐く

囚われの身とはいえ、心身に危害を加えられていないことを知り一安心したのだろう

だが俺の次の質問で再び表情が強張る

「詠は…賈馱は一緒なのですか？」

張世平殿は少し顔を強張らせた後

「いえ、賈馱殿は脱出を図った際怪我をされて、今は治療を受けた後地下牢に閉じ込められてるようです」

その言葉を聞いた俺は少し興奮気味に張世平殿詰め寄ってしまった

「詠が怪我しただと？誰が詠に怪我を負わせやがった！！」

「興奮するな高順」

「殿、そんなに詰め寄ったら張世平殿が困ってしまうでござる」

「やれやれ、とりあえず落ち着かれよ」

それを見た美命、鏡華、趙雲殿に同時に突っ込まれ、少々恥ずかしくなった俺はコホンと一つ咳払いをした後軽く頭を下げ失礼を詫びた

「申し訳ない張世平殿、少々取り乱したようです」

「いえいえ、気にしてませんよ。お仲間が怪我されたと知って憤るのはあなた様がおやさしいからでしょう」

と逆に張世平殿に氣遣われてしまった

「改めて問いますが、怪我の具合はどんなものか知っておいでか？」

少し冷静になった俺が尋ねると

「私が懇意にしてる医者が城に呼ばれ直接治療を行なったそうです
が、とりあえず命に別状はないようです」

「そうですか、とりあえずほっとしました」

これで完全に安心できるわけではないが、二人とも今すぐ命の危機があるわけではないと聞いて少しだけ肩の荷が下りたようだ

「では改めて状況を整理しよう。敵の主犯は従事中郎の王允を中心にした宮廷の旧臣ども、こいつらはさほど問題ではないが問題はそれに追隨する宮廷を守る近衛軍二千、まあ近衛は帝が軟禁状態にあることを知らず帝を守護する為動いてるんだろっが」

つまり帝をお救いすれば、近衛は味方に出来るかもしれない

「それと裏切った李カク、郭？とその直属の千五百の部下」

李カク、郭？の部下は月の陣営に参加する前からの子飼いの部下だ、こちらに味方するとは思わないほうがいいだろう

「それと月は帝と共に軟禁されていて、詠は地下牢に囚われている」

詠のやつまた無茶してなきやいいが、あいつは自分の命より月の身が大切なやつだからな。

「ふむ、なれば夜陰に乗じて城に潜入、帝と董卓殿たちをお救いした後帝に近衛を説得していただくか、説得が無理だとしたら我らだけで洛陽に逃げるしかありませんな」

趙雲殿の意見に俺も頷き

「それしか手はあるまい、出来るだけ敵との戦闘を避け三人をお救いするいいな？」

皆が頷くのを見て話を続ける

「潜入する班を四つに分けるぞ、各班の隊長は俺、美命、鏡華、それと趙雲殿にお願いする」

「承知」

「各班に配する鴉はそれぞれ六人とする。それと残った三人は最悪の場合を考えて待機とする、張世平殿申し訳ありませんがここで待機させてもらって宜しいか？」

「わかりました」

引き受けてくれた張世平殿の軽く頭を下げ続ける

「作戦開始から半日しても誰も戻らぬときは、失敗したと考え待機組みは城外にいる仲間と合流して虎牢関に向かってもらおう」

後は虎牢関の仲間に託すしかないが、一度失敗すれば警戒もさらに厳しくなる二度目はないと考えるべきだろうな

「侵入組みは四つの班を二手に分け、帝と月を救助する方と詠を救助する方にわけろ。そのまま一緒に行動するか別々に行動するかはその場の判断に任せる」

さてあとはどちらに誰を行かせるかだが…

「帝と月は美命と鏡華に、詠は俺と趙雲殿お願いできますかな？」

そう問いかけながら趙雲殿見ると

「ほほう、私を相方にご指名とは、いやいや高順殿は女を見る目がありますな」

と、にやにやしながら答えた、すると

「高順（殿）我らが一緒では不服なのか（でござるか）」

と、とたんに二人がこちらに詰め寄ってきた

「いやいや落ち着けて、美命は潜入任務に慣れてないから鴉の部隊長でもある鏡華と組ませただけで他意はないぞ」

それを聞いて二人ともそれぞれ不承不承ながら頷いてくれた。…納得はしていないようだ。

それを見た趙雲殿は口元を歪め「くっくく」と含み笑いを浮かべ

ていた

ああゝわかった趙雲ってこういう性格なんだ

なんか作戦前だというのにどつと疲れてしまった。

「と、とにかく鴉の面々を集め準備が終わり次第、夜が更けるのを待って作戦を開始するぞ、張世平殿城内の間取りに詳しいですか？」

「おまかせ下さい。私自身何度か城内にも足を運んだことがございますし、他にもいろいろな伝で話に聞いてございます」

「ほんと、どんな情報網を持っているんだか。この人が味方になってくれてよかったよ

「では詳しく聞かせてもらえますか、それと抜け落ちた情報がないかもう一度確認をお願いします」

「承知いたしました、では……」

張世平殿に城内の間取りなどについて教えてもらった俺たちは、夜が更けるのを待って行動を開始した

S i d e : 詠

ギィゝ

軋む様な音を立てて牢への入り口の扉が開き、李カク、郭？が入ってきた

「コンバンハ コネコチャン イイコニシテタカシラ」

あいからわず耳障りな声で喋る

「何のようかしら、ここに招待した覚えはないけれど？」

僕は内心の不安を気がつかれないように、憎まれ口を叩く

「フッフ アイカラワズ カワイイコエデ サエズルワネ ゾク
ゾクシチャウワ」

二人はそう言って互いの体を抱き寄せ、奇妙な動きで悶えながら互いの顔に舌を這わせる

それを目にしても気持ち悪さより、怖さが先立ってしまう

「何？そんな行為を見せ付けたいんなら、他を当たってくれない？
僕にその手の趣味はないんだけど」

全身を襲う震えを押さえ込みながら、二人を睨み付ける

「フッフ ホントウハ スグニアナタモ ナカマニイレテアゲヨ
ウカト オモッタノダケド キガカワツタワ」

そう言いながら蛇のような目でこちらに視線を這わせる

ゾクッ

怖い

また恐怖に全身が泡立つ

「「イマ アナタヲサラオウト ワルイ ユウシャサマガ ココニ
ムカッテルワ」」

え？

「「ソノ ユウシャサマノマエデ アナタヲ オカシツクスノハ
ドウカシラ？」」

なんのこと？

「「ソレトモ ユウシャサマヲ アナタノマエデ バラバラニ シ
テミヨウカシラネ」」

言ってる意味がわからない

「「バカナオトコネ アナタハモウ ワタシタチノ モノナノニ
イマサラ トリモドセルト オモッ テイルノカシラ クスクスクス」」

…取り戻す、男…てまさか！

「「う、高順…君が来てるの？」」

「「クツクツク フッフッフ ハッハハハッハーハーハー」」

二人の狂気の笑い声を聞きながら、僕の心を埋め尽くそうとする絶望の中に、たった一つの希望が点っていた

第二十八話 長安脱出編 その5（後書き）

誤字脱字報告、感想などお待ちしております。

第二十九話 長安脱出編 その6 (前書き)

おまたせしましたー

第二十九話 長安脱出編 その6

虎牢関

Side：零

？水関より撤退してきた霞達を向かい入れた私たちは、早速軍儀を開き現在の状況を確認していた。

「では月様と詠が人質にされてるということですか…確かにあの爺どもならやりかねませんね。それに李カク、郭？の姉妹、あの二人は前々から得体の知れない所がありましたからね…迂闊でした」

連合という目の前の脅威に目が眩んで、後背の敵や獅子身中の虫を見落とすとは……これでは諸国の間諜を任された身としては、月様に合わせる顔がありませんね。

「とりあえず月達のこととは、高順達に任せるしかあらへん。うちらはうちらでやることやるで」

と霞が沈んでしまった空気を入れ替えるように、わざと明るく振舞う

「そうですね、高順は当てにならないですけど何と言ってもお姉さまがいるのですし」

本来ならお姉さまとあの高順肩が一緒にいること自体許せませんけど、状況が状況ですし仕方ありませんね

さて長安のことはお姉さまと鏡華と高順カスに任せて、私は私の任務をこなすしますか

高順^{変態}を始末するのはすべてが無事片付いてからにしましょう

S i d e : 高順

「はつくしゅん！」

むう、なんだか悪口でも言われた気が…気のせいかな？

「風邪ですか高順殿？」

「いや、違うと思いますが」

趙雲殿にそう答えてからもう一度気を引き締め直す

全ての準備を終えた俺たちは、世が深けるのを待つて二手に別れ城に侵入していた

「それよりおかしいとは思いませんか趙雲殿？」

「確かに…あまりにも手薄にすぎる、罠ですか？」

そう城に侵入してからという物、余りに警戒が少なすぎるのだ

むろん見張りが皆無というわけではないが、これでは平時より少ないのではないのか？

どこかより情報が漏れたか？と一瞬考えたが頭を振ってその考えを振り払う

「とにかく引き返すわけにもいかんでしょう」

趙雲殿の言葉に頷き俺たちは、詠が囚われてるらしい地下牢に向かうのだった

S i d e : 鏡華

「むう、おかしいでござるな」

拙者が小声で話すと華雄は「なにがだ？」と疑問を漏らした。

やっぱり判ってござらんかったか、ふうゝやれやれでござるな

多少は出来るようになったようでござるが、所詮猪殿は猪

殿も何がよくてこんなのを連れてきたのやら…

「おい、お前さっきから何か私のことを馬鹿にしてないか？」

うち、野生の猪は感だけは鋭いでござるな

「そんなこと考えてはいないでござるよ、それよりもおかしいとは

思わんでござるか？」

「…なんだか誤魔化された気がするが、だから何がだ」

「わからんでござるか？（やれやれ、これだから脳筋は）警備の目がさつきからあまりになさすぎると思わんか？」

拙者の疑問に猪殿は、ふむと考えた後

「やはり私を馬鹿にしてる件については後でじっくり話をつけるとして、確かにこれでは余りに無警戒すぎるな」

ちっ猪め、気づきやがったでござるか…それはそれとして

「やはり罠でござるかな？」

「だろうな、だが今更引き返すわけにもいかんぞ」

不本意ながら所詮猪華雄殿の言う通りでござるな、ここはあえて虎口に飛び込むしかないか……

拙者らは罠を警戒しながらも、帝と月様がいるとされている部屋に向かつて足を速めた

「…おい、最後まで私を馬鹿にしてたな。後で覚えてろよ」

……。

Side：高順

俺たちはほとんど見張りと接触することもなく、地下牢の前に辿り着いていた

「ここまであからさまだと、向こうも誘つてるとしか思えんですな」
確かに趙雲殿の言う通りこちらが罠と気づくと判つていながら、あえて誘つてるとしか思えんな

だが、たとえこれが罠だとしても行くしかあるまい

今回の機会を逃せば恐らく二度目はない

それに連合が迫ってくるだろうことを考えれば時間的猶予もない

俺は警戒しながらも、牢への扉をゆっくりと開けていった。

ギイイ

軋む様な音を立てて、開いていく扉の隙間から様子を伺うと中には一系まとわぬ姿で倒れている詠の姿があった。

胸が上下してる様子から息はあるようだが、意識がないのかこちらには気づく様子がない

「…詠…詠！」

小声で呼びかけても反応がない

「…趙雲殿」

「うむ」

趙雲殿が頷くのを見て、鴉に待機を命じてから扉の中に体を滑り込ませる

他に人の気配がないか慎重に確かめながら、詠の側に駆け寄った

「詠、しっかりしろ詠！」

体に異常はないか確かめながら、詠を軽く揺すって意識を確かめようとした

「う、ううん」

するとうめき声をあげながら、詠が薄っすらと目を開いていった

「詠、判るか？俺だ高順だ」

「う、うん…こ、こっじゅん、え、高順！？」

「ああ、助けに来たぞ、どこか痛い所とかないか？」

すると詠は目から大量の涙を流しながら、俺に抱きついてきた

「高順！怖かったよ！もっと早く助けに来てよ」

俺は詠の涙を拭きつつ、詠が落ち着くように頭を優しく撫でてあげた

「…コホン、感動の対面の申し訳ないが早く服を着せた方がよろしくないか、風邪をひきまずぞ?」

と趙雲殿の指摘に詠は自身が裸であることを思い出したか、俺から離れると体を隠すように丸めて

「こ、こっち見ないで後ろ向いててよ!?!」

と顔を赤くしながら叫んだ

「お、おうすまない」

と、詠に背を向けつつ、詠が一番気にしてるであろうかと思うことを話す

「月のことだが、今鏡華と美命が助けに向かつてる。俺たちも助けに向かうぞ」

すると衣服を着込んでいる音をさせながら、詠は意外な言葉を返してきた

「え、二人が助けに行っているなら大丈夫でしょ、僕たちは一刻も早くここを出なくちゃ」

「詠?」

その言葉に違和感を感じた俺は詠に疑問を投げかけた

「月のことが心配じゃないのか？」

「そりゃ心配だけど、僕が助けに行っても足手まといだもん。それにここは怖いよ、一刻も早く逃げ出したいよ」

その言葉を聞き疑問が確信に変わるのを感じた俺は、趙雲殿に目配せをした後武器を持つ手に力を込めゆつくりと後ろを振り返った。

「やだ、良いって言うまでこっちを見ないでよ、恥ずかしいじゃない」

と頬を赤らめ恥らう詠に向け、俺は鋭く槍を突き刺した

「…何するの高順、危ないじゃない」

詠は胸に槍が突き刺さりながら、一滴の血も流さずそう言った。

「貴様何者だ？詠に化けるなど趣味の悪いことをしやがって」

そう言いながら胸に刺さった槍を、引き抜いた

「フッフ アララ バレチャツタワネ」

槍が抜けた詠が二つに割れたかと思うと、その二つの塊が二人の人にと変わっていき、ぐもった声をあげる

（なんだあれは…五胡あたりの妖術か？）

そのこの世の出来事とも思えぬ光景に、恐怖を覚えながらも油断な

く構える

「「マア イイワ オアソビハ ココモデニ シマヨウ」「

その異形の者に向かって俺は叫んだ

「貴様ら詠をどうした、李力ク、郭?!」

「「フフフ ククク アハハハハハ」」

異形の者があげる高笑の中、俺は再び槍を構えた

第二十九話 長安脱出編 その6（後書き）

李カク、郭？が妖怪変化みたくなってしまった…。

この2人最初の設定からどんどん離れていくな。

この先どこまでいってしまうやらw

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2735u/>

真・恋姫無双～陷陣営転生伝

2011年11月21日15時52分発行